

部活動紹介

野球部

水高野球部は創部六三年を迎えたが夏の大会では決勝に三度進出したが優勝は未だ無い。平成になり八年の春と秋に準優勝、一四年には春に決勝で宿敵専大北上に打ち勝ち見事初優勝し野球部の歴史に金字塔を打ち建て年々力をつけ「強豪」の代名詞がつく程になり着々と甲子園への期待を抱かせ続けている。最近良く百周年の年に是非との声を聞くが県大会を制するには県で一番の練習量が必要である。文武両道の水高野球部の新入生への入部勧誘文に「野球部は野球も勉強も手を抜かない集団である」希望大と甲子園を一緒に目指すという「甲子園への道」がある。大変な努力が必要である。後援会、OB会、父母会も毎年頑張っている。そんな中、春の関東遠征の際に色々とお世話になっていた東京在住のOB八幡和三郎氏がこの二月にご逝去された事は大変な損失であり残念であります。甲子園への道は今は遠いが必ずや後輩野球部が黒い土を踏むものと確信している。

(OBよりの寄稿)

夏の大会の戦績を掻い摘んで紹介する。

昭和二三年(初出場) 緒戦突破(二回戦敗退対一関一 0-5)
 二八年 不参加
 三四年 初のベスト4 (準決勝 対宮古 1-4)

四三年 初の準優勝
 (決勝 対盛一 2-10)
 四九年 ベスト8

五四年 ベスト4
 (準決勝 対福岡 1-8)

五五年 二度目の準優勝
 (決勝 対福岡 1-2)

六〇年 三度目の準優勝
 (決勝 対福岡 1-3)

六三年 ベスト4
 (準決勝 対釜工 1-6)

平成 三年 ベスト4
 (準決勝 対専北 1-5)

九年 ベスト4
 (準決勝 対専北 4-6)

一二年 ベスト8
 (準々決勝 対前沢 6-7)

二〇年 ベスト4
 (準決勝 対盛岡中央 2-3)

二二年 ベスト8
 (準々決勝 対一関学院 0-3)

※三回戦で宿敵福岡高校と対戦し、11対1、7回コールドで大勝した。水高が公式戦で福岡高校に初めて勝利した記念すべき試合である。

かった。しかし、部員が各々に練習メニューに工夫を凝らし、成果を上げてきたことが大会記録から窺える。陸上競技は、より速く、より高く、より遠くへ、走り、跳び、投げるといふシンプルなスポーツである。シンプルであるが故に、競技についての深い考察をすることができ。また、個人競技というイメージが強い陸上競技ではあるが、リレー競技や、駅伝などの団体競技もある。もちろん、日常の練習自体も一人一人、別々に行うものではなく、部員全員で行うものが多く、日々の練習そのものが部一体となった団体競技であるとも言える。その競技の性質が水高の「友愛・清新・気魄」という校訓と相まって顧問が替わり、世代が変わっても変わることのない部員が自ら練習メニューを立て、実行するという自主自立の精神を持ち、自ら競技研究するという創造の気魄に満ち、共に陸上競技という種目に向かい合うことで友愛と信義を重んずる心身ともに豊かでたくましい人間の形成をするという陸上競技部の空気を作り上げたのではないだろうか。

この一〇年間の部員数は多いときは男女併せて二〇名以上であったり、少ないときは五名程度であったりと部員の増減が激しかった。

しかしながら、そのような状況であつてもリレー競技には積極的に参加してきた。特に、4×400mリレーは毎年のように県高総体において準決勝に出場する程度の力を保持していた。400m走という競技は、短距離走の中でも非常に過酷な種目である。その過酷な種目に

四人一丸となり1マイルを駆ける。この一本のバトンを次の走者に0.1秒でも速く繋ごうと

「Friendship (友愛) とこれまでの練習を信じ、全力で走りきる「Fighting spirit (気魄) を持ちどんなレースであろうとも、自己記録を更新しようとする「Freshness (清新) な競技への姿勢が水沢高校陸上競技部員には受け継がれているのではないだろうか。今年度新たに灯ったマイルの火をこれからも絶やさずに、平成二十三年度のインターハイでは輝かしい結果を出してくれることを期待したい。

この陸上競技部で培った気魄が、共に汗水を流した仲間が水高生活での大きな、大きな宝物になることを切に願う。

〔歴代顧問と主な大会記録(H一三)〕

平成一三年 鎌倉道彦 太田智聡 本館和夫

高総体 男子 4×400m R 準決勝進出

女子 4×400m R 準決勝進出

平成一四年 鎌倉道彦 石川克紀

高総体 男子 4×400m R 準決勝進出

女子 4×400m R 準決勝進出

平成一五年 石川克紀 千田俊久

高総体 男子 4×400m R 準決勝進出

平成一六年 照井貴子 石川克紀

平成一七年 照井貴子 今松正明

平成一八年 照井貴子 今松正明

平成一九年 今松正明 清野達雄

平成二〇年 今松正明 清野達雄

平成二一年 佐々木伸 秋田美紀男



陸上部

〔部活動〕

本校陸上部の歴史を紐解くと、前身は昭和四年に設立された競技部まで遡る約八〇年の伝統を持つ非常に歴史の長い部である。活動初期は陸上競技大会への参加の他にも校内学年対抗試合(今で言う運動会のようなもの)を企画する運動部の中核的な部であったようだ。当時は水高の前身である水沢高等女学院であり、当然部員は女子部員ばかりである。創立百周年を迎える現在の陸上競技部もまた女子部員のみであり、設立当時を思わせる。

ここ十年間の陸上競技部の活動を振り返ると、陸上競技を専門とする顧問が付くことは多くな



広野裕子

ラグビー部

学制改革で男子一年生、油井明(昭和二六年卒)元水沢ラグビー協会会長)、安藤三郎(昭和二六年卒)らが中心となり、菅原成徳先生の指導のもと結成されましたが、公式戦は最初の高体連(昭和二四年)からの出場度一回戦高松高(現盛岡工業)と対戦し37対0で敗れておりますが、翌年の高体連で一回戦三陸高と対戦し14対0での初勝利となりました。



(OBよりの寄稿)

成八年卒)等多彩です。
現在部員不足のなか、専門部の小原信先生の指導のもと高橋伸光(平成一二年卒)コーチを中心に元気に頑張っております。国内のラグビーは、技術的にも攻撃権の確保というところで練習方法も毎年先鋭化しておりますし体力的にも筋トレ、栄養学の時代になり、より専門化しました。近々二回目の国体の開催(二〇一六年)、オリンピック(二〇一六年)に七人制ラグビーの追加、あるいはワールドカップの国内開催(二〇一九年)が決定し県内のラグビーも盛り上がりつつあります。その波に乗り遅れないように、選手の個性を大事にしながら次世代につなげてゆければと思っております。

行つた時期でもあります。赤緑のジャージーはこの時期にできました。そして昭和四三年の花園予選は破竹の快進撃を見せ準決勝まで勝ち上がり、宮古高と対戦して6対3(現10対5)で惜敗しましたが、これが現在までの最高の成績になっております。この時二年生の上村茂は、東京教育大(現筑波大)で一年時より関東大学対抗戦に全試合出場しましたし、一年生の菊地義光は二年後の岩手国体で花園二回目優勝の盛工中心の選抜チームに入り優勝しております。その後ベスト8まで、上がったたり下がったりを繰り返しますが、近年では十五人そろわず七人制に出場したり部の存続が危ぶまれる状況もあります。

龍ヶ馬場の絆は深く、中央大ラグビー部の監督を長年を務め、後輩に関東大学リーグ戦の道を開いてくれた及川悟朗(昭和三二年卒)。その橋渡しをしながら粉骨砕身部員の面倒をみてくれた熱血漢千葉悟郎先生(昭和三五年卒)。その中大三人組は、ジャパン級といわれたプロップ高橋恭弘(平成二年卒)。現在卓越したコーチ理論を持つ人に強いロック及川宏幸(平成三年卒)。怪我に泣きましたが立派にTBでレギュラーを務めた佐藤詠太(平成八年卒)で一時代をつくりました。

熱意ある指導で戸嶋憲久先生、菅原春夫先生(昭和四〇年卒)、田村洋一先生、鈴木淳一先生、小山田吉勝先生、小原信先生(昭和五六年卒)、またお願いし承諾を得ながらも人事の都合で着任できず、定年を迎えてから駆け付けていただいた。

サッカー部(男子)

昭和二十一年、旧制県立水沢中学校が新設された。この時、同校にサッカー部が誕生した。これが水高サッカー部の起源となる。当時の一年生であった山形康夫氏は振り返る。

「当時のグラウンドは現在の水沢小学校で、砂利だらけでゴロゴロしており、もちろんスパイクシューズもなく、素足でボールを蹴って、馬力と力にまかせてただ遠くへ飛ばすロングキックだけでした。」

県内でも水沢地区のサッカーの歴史は古い。当時は旧制盛岡中学出身で昭和一年のベルリンオリンピックでコーチを務めた工藤孝一氏が、サッカー普及のために花巻・水沢・遠野・沼宮内等を巡回指導していた。水高サッカー部もその熱血指導を受けたという。

昭和二五年の『水高新聞』創刊号には次のような記事がある。

「昨年誕生したサッカークラブも今年は数名の新人を迎え入れ総勢十七騎月水金と校庭を所せましとばかりボールをフットバシはついている、過日花巻において行われた水高、花高、盛高の三校リーグ戦は本校は両校に二敗二回戦対盛高は前試合と同メンバーなので疲労のためかパスワークもだめ日ごろの鮮やかなシュートもきまらず四点の差をつけられたのである」

戦後の混乱期であったこの時代は、道具や資金も乏しいうえに、部員数も十分ではなく、部

いた菊池忍先生(昭和四一年卒)には感謝の気持ちでいっぱいです。お世話になった多くの先生方の名前を書ききれず申し訳なく思っておりますが、やっぱり先生方の熱意ある指導で朴訥とした生徒が一生懸命になってここまで続いたのかなと思います。

教育界、役所等にOBが多数在籍しておりますが主だったOBを紹介しますと、創始期に活躍、後輩を支えた高橋信喜(昭和二七年卒)、高橋勝男(昭和三二年卒)、現奥州市ラグビー協会会長の小幡直士(昭和三三年卒)、同理事長の高橋秀之(昭和四二年卒)、東京大で主軸であった水高の顔、参議院議員平野達男(昭和四八年卒)、岩手大から全国地区大学対抗優勝(昭和四四年度)の中島良弘(昭和五一年卒)、奥州市長の小沢昌記(昭和五二年卒)、外交官でフランス在住の川村裕(昭和五二年卒)、高校ラグビー界で長年名レフリーぶりをみせた菊地満(昭和五七年卒)、タグラグビーの先駆者高橋宏幸(昭和五七年卒)、慶応大の大学選手権準優勝(昭和五九年度)の立役者今泉範彦(昭和五七年卒)、筑波大から常総学院高でコーチを務めた及川寿昭(昭和五八年卒)、NHK朝のニュースでおなじみの紅白歌合戦総合司会者を幾度も務めている阿部渉(昭和六一年卒)、最近ではウィルチェアー(車いす)ラグビー日本代表チームのヘッドコーチで強化委員長を兼任する連盟重鎮の岩淵典仁(平成五年卒)、東京大学大学院農学部で博士号を取得し同大学院農学生命科学研究科応用微生物学研究室の特任研究員の佐々木大介(平

活動には大きな困難がともなった。それにもかかわらず、当時抜群の実力を誇っていた盛岡高(現盛岡一高)や、その盛岡高校をこの年の県民体準決勝で破って初優勝した花巻高(現花巻北高)とともに、このようなリーグ戦に参加していることは特筆に値する。水高サッカー部のみならず、水沢さらには岩手のサッカー黎明期における輝かしい一歩といえるであろう。

現在の龍ヶ馬場の地に水沢高校の旧校舎が建設され、昭和二六年には四〇mトラックと野球場を持つ広大なグラウンドも完成した。同年一〇月、完成祝も兼ねて、本校グラウンドで岩手県高校サッカー選手権大会が開催された。水沢高は、一回戦は沼宮内高を三対一、準決勝は花巻高を五対一で破った。決勝は盛岡高との対戦で、健闘およばず一対〇で惜敗した。しかし、前年度東北大会優勝の盛岡高には無条件に出場権が認められていたため、準優勝校の水沢高も、東北高校サッカー選手権大会への出場権が与えられることになった。

この年の十一月、山形市で東北高校サッカー選手権が開催された。一回戦は青森県代表の三本木高を大差で破り、準決勝は地元山形県代表で優勝候補の鶴岡高(現鶴岡南高)との決戦となった。技術の差を気魄で跳ね返すような激闘が続き、「点を取られても喰らいついて取り返す」壮絶な試合となったが、接戦で涙をのむことになった。

創立以来、めきめきと頭角を現してきた水高サッカー部ではあるが、この東北高校サッカー



金光氏は「チーム全員で勝ち取った勝利」と振り返る。

平成一六年は、「リーグ」がスタートした年でもある。最初は県内三大会のポイント上位八チームが参加する大会であったが、次第に組織が拡大され、今日では県下の高校サッカー部のほとんどが参加する三部制リーグ戦形式の大規模な大会となっている。水高サッカー部も当初からこれに参加しているが、大会規模の拡大とともに、平成二〇年に二部から三部へ降格し、平成二一年からは三部県南リーグに所属している。

高総体などのトーナメント形式の大会とはことなり、大規模な総当たりのリーグ戦形式の大

となったが、遠野高戦の疲れが出たか延長の末敗れた。

水高サッカー部の活躍は続き、昭和三七年、三九年の高総体で四強入りを果たしている。昭和四四年の新人戦でも四強入りを果たし、翌年の高総体では上位入賞が期待されたが、一回戦で盛岡三高と対戦し、延長の末二対三で無念の涙をのんだ。

昭和四五年には第二五回岩手国体が開催されたが、この年から国体のサッカー競技高校部門が都道府県毎の選抜チーム編成となる。水高サッカー部からは庄司博明氏が岩手県高校選抜チームで国体出場を果たした。

また、昭和四八年の新人戦では、二回戦遠野高に三対〇で勝利し、さらに上位入賞を目指して、準々決勝で釜石北高と対戦したが、二対二と決着がつかず、抽選の末敗れた。翌四九年の高総体でも上位入賞が期待されたが、一回戦一関一高と対戦、一対一で決着がつかず、抽選でもたしても涙をのんだ。

その後も水高サッカー部は県の最高レベルと互角に渡り合い、しばしば八強入りを果たしている。昭和五九年の県民体では準決勝に進出し、四強入りも果たした。平成六年の県民体では、準々決勝で大船渡高に挑み、後半残り五分まで一対〇と大健闘を演じたが、これで勝てると思った瞬間に「悲劇」が起こり、一対二で惜敗した。

近年の八強入りでは、平成一六年の高校サッカー選手権岩手県予選での奮闘が記憶に新しい。

会は、部活動としては大きな負担をとまう。しかし、県の高校サッカー界はすでにこのリーグ戦を中心として動き始めている。新しい時代に向けて、チームも個人も一層のレベルアップが必要である。「強き伝統」を受け継ぐ者として、誇り高く戦ってほしい。

サッカー部(女子)

平成元年に同好会として創部され、翌年部に昇格した。若手県内においてはまだ女子サッカーという競技に対しての認識や理解があまりない時代であったため、県内では女子サッカーの先駆者の立場の部と言える。当時は女子サッカー部のある高校は本校と遠野高校宮森分校の二校だけであったが、平成一五年頃には一二校にまで加盟校が増えた。東北管内では宮城の一五校に次ぐ数であった。県内の多くのサッカー関係者のご尽力の賜物である。また、県高体連にも平成二年から加盟し、県高校総体の一競技として実施されてきている。平成二〇年には日本サッカー協会が中心となり、また、全国の多くの高校女子サッカー関係者はたらくで、全国高体連への加盟を成し遂げた。平成二二年度中に東北高体連への加盟手続きを済ませた後、インターハイ種目として認められる見通しである。平成二四年の新潟インターハイからは女子サッカーが競技種目のひとつとして開催される予定である。

近年、女子小学生の競技人口が増え、その経験者達が中学生対象のクラブチーム(現在は県内登録は三チーム)で活動を続けていることもあり、多くの高校に小学校からのサッカー経験者が入学するようになった。結果として高校女子のレベルもこの十年で大幅に向上した。本校においても、八年前までは初心者が集い、お互いに切磋琢磨して技術の向上に努め、県の頂点を制してきたが、現在では各学年に一人〜二人の経験者があり、それらの選手が中心となって、知識やメンタル面・個々の技術面をお互いに高め合っている。特にボールの飛距離はここ数年で格段の向上が見られる。また、パスを中心としたサッカーが展開されるようになり、戦術的なレベルの向上にもつながっている。

同好会の創部から数えて平成二二年で二一年目を迎える。水高百年の歴史の中においては新参者の部ではあるが、この二一年間での実績は輝かしいものがある。県高等学校総合体育大会においては二二大会中、一連覇を初めとする一七回の優勝や、県民体育大会での六連覇、新人戦の一三連覇等の成績を収め、多くの優秀な選手を輩出してきた。大学や関東のクラブで活躍する選手や、岩手でサッカーの指導者を目指している選手、国体の選手として東北総体に出場している選手(国際一級の資格を持つ審判員等)数々の実績を上げながら活躍し続けており、他に誇れる多くの卒業生がいることは、二一年という年月で充実した濃い部活動が展開されてきたことを意味し、それぞれの時代に高校三年

選手権での大躍進を境に苦境に立たされる。その大きな原因が昭和二九年の商業科分離(水沢商高の設立)である。部員の多くが商業科で、水高としての部員は三人のみとなってしまった。当時三年生であった佐藤実氏によれば、新たな部員の勧誘もおぼつかず、三人で「解散を協議する」ほどであったという。しかし、たまたまそれを知った先輩たちが来校し、「伝統ある水高サッカー部をお前がつぶしたら承知しないぞ」と大ハッパをかけたそうである。その後、気を取り直して熱心に部員勧誘を行った結果、二年生だけでも一チームになるほど増員された。さらに猛練習によるチーム強化も功を奏して、昭和三〇年の県選手権大会では一回戦で盛岡一高を久々に破り、大会を盛り上げた。次の準決勝で盛岡商高に破れたものの、県下三位の好成績を収めた。

ようやく部員数も回復し、小柄ながら三年生主体のチームとなった昭和三三年には、技術はもとより「水高の欠点」といわれた「耐久性とファイト」の強化に力を注ぎ、大いに期待の出るチームに仕上がった。高総体の二回戦では優勝候補の平館高と対戦し、前半には先制点をゆるしたものの、後半に入ると各々奮闘して形勢が一転、水高有利となって二点を取り、見事な逆転勝ちを収めた。準決勝は優勝最有力候補の遠野高との対戦となったが、ここでも先制点をゆるし、平館高戦の再現をはかろうとしたが、結局後半に追加点をあたえ惜敗した。続く三位決定戦は盛岡商高との対戦で、これも好ゲーム

となったが、遠野高戦の疲れが出たか延長の末敗れた。

水高サッカー部の活躍は続き、昭和三七年、三九年の高総体で四強入りを果たしている。昭和四四年の新人戦でも四強入りを果たし、翌年の高総体では上位入賞が期待されたが、一回戦で盛岡三高と対戦し、延長の末二対三で無念の涙をのんだ。

昭和四五年には第二五回岩手国体が開催されたが、この年から国体のサッカー競技高校部門が都道府県毎の選抜チーム編成となる。水高サッカー部からは庄司博明氏が岩手県高校選抜チームで国体出場を果たした。

また、昭和四八年の新人戦では、二回戦遠野高に三対〇で勝利し、さらに上位入賞を目指して、準々決勝で釜石北高と対戦したが、二対二と決着がつかず、抽選の末敗れた。翌四九年の高総体でも上位入賞が期待されたが、一回戦一関一高と対戦、一対一で決着がつかず、抽選でもたしても涙をのんだ。

その後も水高サッカー部は県の最高レベルと互角に渡り合い、しばしば八強入りを果たしている。昭和五九年の県民体では準決勝に進出し、四強入りも果たした。平成六年の県民体では、準々決勝で大船渡高に挑み、後半残り五分まで一対〇と大健闘を演じたが、これで勝てると思った瞬間に「悲劇」が起こり、一対二で惜敗した。

近年の八強入りでは、平成一六年の高校サッカー選手権岩手県予選での奮闘が記憶に新しい。

水沢高のような進学校では高総体を期に三年生が引退し、選手権予選は二年生中心の新チームで出場することが多い。この年の二年生は十七名と充実していた。小・中学以来の経験者がそろい、しかもチームワークのよさは随一であったという。その二年生中心の水沢高がこの大会で二次予選に進出し、八強を目指すというので、当時は大いに盛り上がった。しかし、八強といえば遠野高のほかはすべて盛岡地区の高校であり、水北地区の高校の評価は芳しくなかった。八強を賭けた盛岡四高との試合を、当時主将であった金光豪氏は次のように回想する。

「試合が開始して五分でシュートを三本打たれ、一本はポスト直撃の決定球。格の違いを見せつけられた。しかし、ある男の一振りがその雰囲気全てを吹き飛ばす。敵陣寄りのセンターサークル付近でもらった約四〇mはあるフリーキック。小学校から一緒にサッカーを始め、チームの十番を背負う千田健一朗の一振りはそのまま入った。その瞬間涙がググッと込み上げてきた。『イカンイカン、まだ前半十分』と思いきや、試合中に泣きそうになったのは初めてだった。そこから間もなくコーナーキックのチャンスをもらい、二点目もあっさり入る。この瞬間に初めて勝利を意識したが、そこから一点を返され、後半は常に攻められる形になった。ボール支配率は三割も無かったと思う。降りしきる雨の中、守って、守って、全員で守った」。

試合終了を告げるホイッスルが鳴り、二対一で盛岡四高を破った水沢高は八強入りを決めた。



H 21・11・県新人大会（7年ぶり14回目の優勝）

- 第六一回県高校総体 準優勝
- 第一八回全日本高校女子東北大会 ベスト8
- U-18県女子選手権 第三位
- 第二二回県女子サッカー選手権 第三位
- 県高校新人大会 優勝
- 第二回東北高校新人大会 出場
- 平成二二年度 出場
- 第六二回県高校総体 優勝
- 第一回花巻市長杯 優勝
- 第一九回全日本高校女子東北大会 出場

間をサッカーにかけた少女達の青春の証と言える。

大会成績（県内大会は三位以上）

- 大会成績（県内大会は三位以上）
- ・平成元年度 東北女子サッカー選手権県大会 準優勝
- ・平成二年度 第四二回県高校総体 優勝
- ・平成三年度 第三回県女子サッカー選手権 優勝
- ・平成三年度 第一回全日本高校女子東北大会 出場
- ・平成四年度 第四三回県高校総体 優勝
- ・平成四年度 第四四回県高校総体 優勝
- ・平成五年度 県高校新人大会 優勝
- ・平成五年度 第四五回県高校総体 優勝
- ・平成六年度 県高校新人大会 優勝
- ・平成六年度 第四六回県高校総体 優勝
- ・平成六年度 第三回全日本高校女子東北大会 出場
- ・平成六年度 第四六回県民体育大会 優勝
- ・平成七年度 第七回県女子サッカー選手権 第三位
- ・平成七年度 県高校新人大会 優勝
- ・平成七年度 第四七回県高校総体 優勝
- ・平成八年度 第四回全日本高校女子東北大会 出場
- ・平成八年度 県高校新人大会 優勝
- ・平成八年度 第四八回県高校総体 優勝



H22・6・県高校総体（2年ぶり17回目の優勝）

- 第五回全日本高校女子東北大会 第三位
- 第四八回県民体育大会 優勝
- 第九回県女子サッカー選手権 準優勝
- ・平成九年度 第四九回県高校総体 優勝
- ・平成一〇年度 第一〇回県女子サッカー選手権 準優勝
- ・平成一〇年度 第五〇回県高校総体 優勝
- ・平成一〇年度 第五〇回県民体育大会 優勝
- ・平成一〇年度 県高校新人大会 優勝
- ・平成一一年度 第五一回県高校総体 優勝
- ・平成一一年度 第五一回県民体育大会 優勝
- ・平成一一年度 県高校新人大会 優勝
- ・平成一二年度 第五二回県高校総体 優勝
- ・平成一二年度 第九回全日本高校女子東北大会 第三位
- ・平成一三年度 第五二回県民体育大会 優勝
- ・平成一三年度 第五三回県民体育大会 優勝
- ・平成一四年度 県高校新人大会 優勝
- ・平成一四年度 第五四回県高校総体 優勝
- ・平成一四年度 第一一回全日本高校女子東北大会 第三位
- ・平成一四年度 第五二回県民体育大会 第三位
- ・平成一四年度 第一五回県女子サッカー選手権 準優勝
- ・平成一四年度 県高校新人大会 優勝
- ・平成一五年度 第五五回県高校総体 優勝
- ・平成一五年度 第一二回全日本高校女子東北大会 出場
- ・平成一五年度 第五五回岩手県民体育大会 第三位
- ・平成一六年度 県高校新人大会 第三位
- ・平成一六年度 第五六回県高校総体 優勝
- ・平成一七年度 第一七回県女子サッカー選手権 第三位
- ・平成一七年度 第五七回県高校総体 第三位
- ・平成一七年度 第五七回岩手県民体育大会 優勝
- ・平成一八年度 第一八回県女子サッカー選手権 準優勝
- ・平成一八年度 県高校新人大会 準優勝
- ・平成一九年度 第五八回県高校総体 第三位
- ・平成一九年度 第五九回県高校総体 優勝
- ・平成一九年度 第一六回全日本高校女子東北大会 優勝
- ・平成二〇年度 県高校新人大会 第三位
- ・平成二〇年度 第六〇回県高校総体 優勝
- ・平成二〇年度 第一七回全日本高校女子東北大会 優勝
- ・平成二一年度 U-18県女子選手権 第三位
- ・平成二一年度 県高校新人大会 準優勝
- ・平成二一年度 第一回東北高校新人大会 出場

バスケットボール部

輝かしい伝統を持つ本校籠球部は、水沢高等学校時代の昭和五年に創設された。初の試合が同年一〇月一七日に行われ、前年の優勝校盛岡高女と対戦したが、実力の壁にはいかんともし難く、0-62のスコアをもって惨敗した。しかし、翌年の昭和六年、県下女子大会では盛女を13-11で敗った。昭和十一年には前年度優勝校師範を32-28で下し、準決勝で盛女を25-16

で敗り、優勝を目前にして決勝戦で黒女にわずか1点差で涙をのんだ。昭和一五年、ついに県大会で優勝し、第一一回明治神宮大会（団体の前身）への出場を果たした。当時籠球コートは校庭に一面あるだけで、屋内体操場（講堂）は卓球部の練習だけで一杯という悪条件の中にあつた。神宮外苑水泳場板張り特設コートで行われた緒戦、鹿兒島県立国分高女に4-17のスコアで敗退したが、本校初の全国大会出場であつた。昭和一七年にも県大会で盛岡高女を下して優勝し、第一三回国民錬成体育大会に駒を進めたのである。しかし、今回も第一回戦奈良県立桜井高女の前に無念の涙をのんだ。当時は既に物資不足もひどく、ボールは配給制となつて二個しかなく、ユニホーム・ブルーマ等もほとんど手に入らず、母親の着物の裏をはがして作ったものを用いた。運動靴も皆無で、練習時は勿論、県大会も全国大会も全員裸足で出場したのである。なお、時局柄、この種の大会は翌十八年からは中止となつた。

昭和二三年に現在の水沢高等学校となつた。籠球部はこの年岩手県下高等学校バスケット大会の決勝で、男子は県立黒沢尻高を32-23で破り優勝し、女子は23-37で惜しくも優勝を逸した。今日の本校籠球部の輝かしい伝統はここから始まった。以後、東京教育大学からコーチを招き、部の強化を図つた。昭和二十七年には県下高校バスケットボール大会（インターハイ予選）の決勝戦で岩手高を37-36の大接戦で破り優勝した。この年岩手・宮城大会でも優勝を果たし

た。こうして本校籠球部の第一期黄金時代の幕が開かれた。翌二八年、本校体育館と町立沢中学校の体育館で県下高等学校バスケット大会が開かれ、男子は岩手高を36-23、女子は盛岡市立高を29-28で破り、共に優勝した。男女ともに全国大会の出場権を獲得したが、参加費の関係で男子のみが出場した。全国大会での活躍めざましく四回戦(準々決勝)まで進出し、地元校で前年度優勝校三条高に51-52で惜しくも敗退したが、ベスト8に輝き全国第6位にランクされた。

昭和三七年、本校籠球部は第二期黄金時代を迎えた。この年の男子は、高総体において準決勝で盛岡商高に惜敗した。普通なら選手は高総体で引退することが多かったが、この年は全員県民体まで頑張ることができた。そして、県民体の決勝で盛岡商高を破り優勝し、東北大会(東北高校選手権大会兼国体予選会)への出場を果たしたのである。東北大会の一回戦は仙台二高、二回戦は磐城高をそれぞれ破り、準決勝で山形南高も破り決勝に進出した。盛岡工高との岩手県同士の決勝となった。一進一退の攻防が続き、延長の末遂に47-44で盛岡工高を破り優勝を果たしたのである。昭和三八年には県民体で優勝し、二年連続で東北大会に出場した。昭和三九年には高総体で圧倒的な強さで優勝し、インターハイに出場した。この時代、本校籠球部は常に県内のトップレベルにあった。昭和四三年には現第一体育館の落成記念行事が日本鋼管、東京教育大学などを招き盛大に行われた。

準優勝であった。平成一五年の高総体決勝でも盛岡市立高に45-68で破れ準優勝に終わった。記録に残っている本校籠球部の大会成績は、昭和二四年から始まった高総体では男子は優勝二回、準優勝五回、女子は優勝五回、準優勝十一回であり、昭和三〇年から始まった新人大会では男子は優勝二回、準優勝二回、女子は優勝五回、準優勝五回、準優勝五回を誇っている。このようなすばらしい実績を残している本校籠球部は、県内外で活躍する多くの指導者をも輩出している。平成三年の女子のインターハイ出場以来、男女とも全国大会出場の際には恵まれていないが、各大会で上位に進出している。これまでの伝統は確実に現在まで受け継がれており、今後の活躍が期待される。



昭和四六年女子籠球部は、高総体で接戦を切り抜け優勝しインターハイに出場した。県民体でも準決勝の修紅高とは三点差、決勝の盛岡市立高とは二点差で勝利を得、全国大会(和歌山国体)に出場することができた。昭和四九年の高総体は、優勝を決めるのに、四チームの決勝リーグ戦を行っていた。本校男子はそれを含む全五試合をすべて二〇点以上の差をつけて優勝した。速攻と外からの攻撃を防ぎきれないフェンス力を持ったチームは県内にはなかった。インターハイは九州福岡市で行われた。緒戦の対戦相手は安田学園(東京)であった。前半はリードしたものの、後半になって追いつかれ、延長にもつれこんだ。延長戦も接戦を繰り広げたものの、終盤パスカットからの逆転ゴールを決められ80-81で惜敗した。昭和五四年、五〇年にも高総体決勝まで進出したが、それぞれ盛岡一高に69-94、盛岡工高に68-82で破れ共に準優勝に終わった。昭和六〇年、女子は高総体では決勝で白百合学園に69-70の一点差で惜敗したが、県総合選手権大会において、社会人・大学生を撃破し初の優勝に輝いた。翌昭和六一年には、前年一点差で破れている宿敵白百合学園と決勝で対戦し、新人大会でも選抜大会でも一度も勝てなかった相手に対し、晴れの舞台である高総体決勝で二点差で勝つことができたのである。しかし、一五年ぶりの岡山インターハイでは一回戦で鹿児島女に48-110と大敗してしまった。翌年の昭和六二年にも高総体決勝で白百合学園を破り連続してインターハイに出場し

卓球部

水高卓球部の歩み

過去一〇年間の水沢高校卓球部の足跡を顧みるに、黄金期として平成一四年から一六年にかけて男子が三年連続高総体県大会団体優勝、インターハイ出場が特筆される。そこには、放課後や休日にも多忙にもかかわらず熱心に指導していただいているOB有志会の組織力、指導力に負うところが大きい。現在も先輩諸氏の打ち立てた偉業を仰ぎつつ、再び全国大会出場を誓い、卓球場「白龍館」で日々の練習に励んでいる。

- 平成一三年度
- ・高総体 男子学校対抗(第二位)
 - 男子ダブルス：柏山・伊東組(第三位)
 - ・県民体 シングルス：伊東(第二位)
 - ・新人大会 男子学校対抗(優勝)
 - 男子シングルス：伊東(第三位)
 - 男子ダブルス：伊東・高橋組(第二位)
 - ・選抜大会県予選 男子学校対抗(優勝)
- 平成一四年度
- ・高総体 男子学校対抗(優勝)インターハイ出場
 - 男子シングルス：阿部(第三位)インター

た。しかしながら一回戦の壁は厚く東亜学園(東京)に39-73と破れた。

平成元年、男子籠球部は高総体準決勝で盛岡工高に87-90で破れたものの、選抜大会決勝で盛岡工高を60-59で下して優勝し、東北大会へ出場した。続く平成二年にも高総体決勝まで進出したが、盛岡工高に64-72で破れ準優勝に終わった。しかし、県民体では準決勝で盛岡工高を68-54、決勝では盛岡南高を80-68で下して優勝した。その後男子はなかなか上位に勝ち上がれなかったが、平成九年新人大会においてベスト4、以降新人大会では一〇年、一一年、一二年、一六年にベスト4となっている。高総体でも平成一一年岩手インターハイの年、三位となり東北大会に出場した。平成一二年、一四年の高総体においてもいずれも準決勝で盛岡南高に破れベスト4に終わった。

女子籠球部は平成二年高総体決勝で白百合学園に63-74で破れ準優勝であったが、翌平成三年には高総体決勝で白百合学園を61-47で下し、インターハイに出場した。インターハイでは、またしても一回戦で足羽高(福井)に47-78で敗退した。この年の新人大会でも決勝で白百合学園に72-63で勝ち優勝したが、翌平成四年の高総体では決勝で白百合学園に46-59で破れ準優勝に終わった。平成六年にも新人大会決勝で白百合学園を84-81で下し優勝したが、翌平成七年の高総体では決勝でまたもや白百合学園に46-79で破れ準優勝に終わった。新人大会では、平成九年、一一年にベスト4、平成一四年には



高校総体男子学校対抗初優勝の選手たち

- ハイ出場
- 男子ダブルス：伊東・高橋組(優勝)インターハイ出場
 - ・インターハイ 男子学校対抗(ベスト16)
 - ・県民体
 - 男子シングルス：高橋(優勝)
 - 男子ダブルス：伊東(第二位)、阿部(第三位)
 - ・新人大会 男子学校対抗(第三位)
 - 女子学校対抗(ベスト8)
 - 男子シングルス：阿部(第二位)
 - 加藤(第三位)



平成22年度東北大会出場の男子

- 男子シングルス：菅原へ第五位へ東北大会出場
- 大槻へ第六位へ東北大会出場
- 高橋 東北大会出場
- 男子ダブルス：菅原・大槻組へ第三位へ東北大会出場
- 新人戦 男子学校対抗へ第三位へ
- 女子学校対抗へ第三位へ

- 男子ダブルス：阿部・那須組へ優勝へ
- 加藤・佐々木組へ第二位へ
- 選抜大会県予選 男子学校対抗へ第二位へ
- 平成一五年度
- 高総体 男子学校対抗へ優勝へ
- 男子シングルス：加藤へ優勝へ
- インターハイ出場
- 男子ダブルス：那須・阿部組へ第二位へ
- インターハイ出場
- 加藤・佐々木組へ第三位へ
- 県民体
- 男子シングルス：阿部へ優勝へ 国体出場
- 新人大会 男子学校対抗へ優勝へ 東北大会出場
- 男子シングルス：加藤へ第二位へ 東北大会出場
- 那須へ第三位へ 東北大会出場
- 佐々木へ第三位へ 東北大会出場
- 男子ダブルス：加藤・那須組へ優勝へ 東北大会出場
- 佐々木・遠藤組へ第三位へ 東北大会出場
- 選抜大会県予選 男子学校対抗へ優勝へ 東北大会出場
- 平成一六年度
- 高総体 男子学校対抗へ優勝へ インターハイ

- 出場
- 男子シングルス：加藤へ優勝へ
- インターハイ出場
- 佐々木へ第三位へ
- 男子ダブルス：加藤・那須組へ優勝へ
- インターハイ出場
- 佐々木・遠藤組へ第三位へ
- インターハイ出場
- 県民体
- 男子シングルス：佐々木へ第二位へ
- ミニ国体出場
- 加藤へ第四位へ
- 新人大会 男子学校対抗へベスト8へ
- 男子シングルス：遠藤へ第三位へ
- 平成一七年度
- 高総体 男子学校対抗へベスト8へ
- 新人大会 女子学校対抗へ第三位へ
- 平成一八年度
- 高総体 男子学校対抗へベスト8へ
- 新人大会 男子学校対抗へベスト8へ
- 女子学校対抗へ第三位へ
- 女子ダブルス：青木・佐々木組へ第二位へ
- 平成一九年度
- 高総体 男子学校対抗へベスト8へ
- 女子学校対抗へベスト8へ
- 新人大会 男子学校対抗へ第三位へ



新人戦第3位の女子

- 男子シングルス：鈴木へ第三位へ
- 選抜大会県予選 男子学校対抗へ第二位へ
- 男子シングルス：鈴木へ第三位へ
- 平成二〇年度
- 高総体 男子学校対抗へベスト8へ
- 新人大会 男子学校対抗へ第三位へ
- 男子シングルス：菅原へ第五位へ
- 県卓球専門部強化事業韓国遠征に選抜される。
- 選抜大会県予選 男子学校対抗へ第三位へ
- 男子シングルス：菅原へ優勝へ
- 全国大会出場
- 山田へ第二位へ
- 平成二一年度
- 高総体 男子学校対抗へ第三位へ
- 男子シングルス：菅原 東北大会出場
- 男子ダブルス：菅原・山田組 東北大会出場
- 鈴木・芳沢組 東北大会出場
- 全日本選手権（ジュニア）県予選
- 男子シングルス 菅原へ第二位へ 全日本選手権出場
- 新人戦 男子学校対抗へ第三位へ
- 男子シングルス：菅原へ第三位へ
- 選抜大会県予選
- 男子学校対抗へ第三位へ
- 男子シングルス：高橋へ第二位へ
- 平成二二年度
- 高総体 男子学校対抗へ第二位へ

ソフトテニス部

ソフトテニスの歴史は日本の近代化の流れと軌を一にしており、一八七四年（明治七年）にイギリスで発生したローンテニス（日本に伝えられた。当時、ローンテニスのボールは国産化できず、比較的安価なゴムのボールでプレーしたこと）から軟式庭球は始まる。初めは、ローンテニスのルールをそのまま当てはめていたが、一九〇四年（明治三十七年）、東京高等師範学校、東京高等商業学校、早稲田、慶応の四校の代表が集まりルールを制定。ボールも三田土ゴムが国産球を完成し、量産体制が整った。また、東

京高等師範学校の卒業生が教員として赴任していく中で全国に普及していった。
本県への普及も同様で、高等師範学校の卒業生が岩手師範や旧制中学校、高等女学校で広めた。県内で最初のテニスコートは明治三二年、岩手師範に作られ、その後、各地の学校に整備されていった。
本県への普及のもう一つの流れは、明治三七年、水沢緯度観測所にテニスコートが作られたことである。明治三二年に赴任した初代所長、木村栄博士は乙項の発見者として世界的に有名な科学者であったが、一方でテニスの熱狂的な愛好者であった。緯度観測所を訪問したことのある宮沢賢治の童話には、緯度観測所でテニスに興じる「木村博士」が描かれている。観測所のテニスコートは所員のみならず、市民にも開放され、天文台クラブが作られた。岩谷堂・水沢の対抗戦や水沢天文台庭球大会などの大会も開かれるようになり、胆江地区への普及の拠点になった。
このような環境の下、本校のソフトテニス部は長い伝統の中、県下の中心として活躍してきた。胆沢郡立実科高等女学校の創設の頃から庭球が校内で行われてきた。大正一三年六月一日日県庁コートで行われた第二回県下女子庭球大会へ水沢実科高等女学校が参加したのが対外試合での最も古い記録である。この時の参加校は本校のほか女子師範、盛岡女、盛岡実女、花巻女、一関女、岩谷堂女、遠野女、一戸女の十校であった。昭和初期には、県下女子中等学校庭

球大会において昭和九年と一〇年二年連続で準優勝、昭和十四年にも準優勝の記録が残っている。

戦後の学制改革により新制水沢高等学校として発足し、実科女子時代の女子のみならず、男子も各種大会で好成績を収め、活躍した。男子は新人大会では昭和四七年優勝を果たしている。高総体では昭和四八年に優勝。昭和四三年、五六年、平成元年、四年と四度の準優勝を数える。個人戦では昭和五二年新人大会優勝の朝日田・千田組が高総体でも優勝して、インターハイベスト16、全国ランキング十位で表彰された。また、五六年には小野寺・鈴木組が優勝している。そのほか新人大会では昭和四八年に千葉・野呂組、昭和六一年に千葉・川口組、平成元年に大越・吉田組、平成三年に菊池・松本組がそれぞれ準優勝している。女子は新人大会で昭和五三年と昭和六〇年に団体戦準優勝。平成一七年には佐藤・千田組が優勝を果たした。高総体では昭和五七・五九・六一年の三度優勝を誇る。これは通算優勝回数七位の成績である。特に一六一年広島インターハイではベスト16まで勝ち上がった。これは岩手県の女子チームとしては最高の記録である。そのほか昭和四四年と平成一七年に準優勝している。個人戦では昭和六〇年に高橋・小野組が準優勝、昭和六十一年には高橋・渡辺組が優勝した。

このような好成績の背景には、地域のソフトテニスへの熱意と指導者の熱心な指導、また、何よりも選手達のソフトテニスへの情熱が挙げ

ていたが、校地西側松林に新テニスコートの計画が立ち、当時の校長阿部克衛先生と顧問の石川芳信先生の先を見越した考えのおかげで、学校の施設としては県内最大規模の六コートの完成を見ることになった。

コートが完成するまでの女子部の大会成績は、地区予選を通過したり、しなかったりのレベルで昭和五二年度の高校総体は、団体地区敗退であった。その後七月に六面のコートが完成し、男子三コート女子三コートとなり、今までの三倍練習が出来る環境に生まれ変わった。完成した後の新人県大会では、団体第三位と躍進した。当時の部活動は六時までと決められていたので、練習場所・練習量が増えたことが一番の原因であったと思う。五三年度には、新人大会準優勝・選抜大会三位と県上位の常連校となり、四年目の五五年度の高校総体では団体準優勝・個人でついにインターハイの出場権を獲得した。(個人はその後七年連続インターハイ出場を果たしている。)六年目の五十七年には、ついに高校総体団体優勝を成し遂げ、水沢高校に全てのクラブで十数年ぶりの優勝旗をもたらした。その後も五九年・六一年に高校総体団体優勝を成し遂げた。六一年度は、顧問及川征一先生(三一年度卒)指導の下、広島インターハイに団体・個人二組が出場した。団体は一回戦・二回戦を勝ち上がり、三回戦で全国三位入賞の熊本中央高校に敗れたものの、全国一六本入りを成し遂げた。思えば、その当時は朝練習も禁止で、放課後は六時までの部活動時間であった。朝の一回戦

られるが、施設の充実もまた関係するであろう。龍ヶ馬場に旧校舎が整備された折には体育館の南北に二面ずつ計四面のテニスコートが作られた。校舎の新築に伴ってコートは二面のみになっていた。しかし、昭和五二年に学校の施設としては全国でも珍しい六面ものテニスコートが整備された。また、昭和一四年にはコートの



に勝たなければ、二回戦はない。朝になれるため、朝練習は必要。」と職員会議の議題に取り上げていただいた。「授業の前に部活動をする事は考えられない。」「進学にはマイナスである。」との意見と激論となったが、他の部顧問の賛成の声を頂き認めていただいたこともあった。その後、野球部も含め多くの部が大会前に朝練習をするようになった。それが昭和五十七年高総体で、ソフトテニス女子、弓道男子、ウエイトリフティング、山岳男子の優勝や六一年度のソフトテニス女子、バスケット女子、バレー男子、山岳男子の優勝につながったと思う。

また、卒業生が来て指導や練習によく参加して頂いた。合宿などでは、マンツーマンで教わることもあった。このようなOBとのつながりも大きな要因であったと思う。今後も母校の更なる活躍を期待したい。

ハンドボール部

ハンドボール部の歴史

岡市 武

昭和四八年春、二年生を中心とし、男女合わせて二十数名で同好会が設立され、水沢高校ハンドボール部の歴史が始まった。と岩手県ハンドボール協会四〇周年記念誌に記されている。寄稿してくださったのは昭和五〇年卒 高橋健氏、五四年卒 小沢利彦氏、五五年卒 菊地厚氏の三氏である。

二面を全天候型に改築し、県内有数の環境を誇っている。

昭和五五年八月一日付で千葉勝也氏を初代会長として、水沢高校ソフトテニス部同窓会が組織された。ソフトテニス部在籍だった卒業生を対象とし、会員相互の親睦及び現役生への指導及び経済的援助を目的とする。現在は、辻山健一郎氏、後藤康次氏、及川征一氏を参与とし、千葉英寛氏が会長を務め、ソフトテニス部を陰ながら支えている。

また、OBには中学校や高等学校の教員としてソフトテニスの指導を続け、全国中学校体育大会やインターハイの監督として、全国的に活躍している者が多い。岩手のソフトテニスは水高OBによって支えられていると言っても過言ではなからう。

「三度の県高校総体団体優勝・インターハイ一六強入り」

コートと共に成長した女子ソフトテニス部

五二年度〜六〇年度顧問
及川 通(四四年度卒)

現在の六面のテニスコートが完成したのは、私が赴任した昭和五二年であった。旧校舎の時は、東側に木造の体育館があり、その南北に二コートずつ四面があった。当時としては多い面数で種々の大会が行われていた。現校舎建築に伴いプールの横に男女で二コートとなり活動し

コート、用具、部室、指導者もない状態から活動を始めた。従って、同好会としての最初の活動はコートの確保・整備であった。指導は、当時岩手銀行水沢支店に勤務されていた泉沢氏に毎土曜日コーチとして来ていただき、秋には、チームとして一応の形が整い始めた。そして、初の練習試合は花巻北であった。その後、花巻北とは大会でも対戦することが多かったようである。

五三年の高校総体では、新人戦、室内大会いずれも力でねじ伏せられた花巻北と準決勝で対戦し、雪辱を期して挑んだが、力及ばず完敗で第三位の結果であった。

平成元年顧問であった菅原完司先生は、「部員自身の努力によって作られ、続けられてきた部である。」「中略」ここ数年は男女とも部員数がある程度確保されており、この地域にハンドボールが根ざせば、将来指導者として活躍できる能力を持った生徒達であり、ぜひ新たな飛躍を期したいものである。」と仰っている。(協会四〇周年記念誌より)

顧問された先生方の多くは専門家ではなかったが、部員達を暖かく見守り、支え、指導していただいたお陰で、継続して活動できたことを感謝したい。

昭和五〇年代は、男子が高校総体などで第三位になり、平成になってからは、女子が高校総体などでベストエイトに数回入り好成績を残した。

現在は、部員数が男女合わせて四〇名を超える大所帯である。毎週水曜日の放課後と土日の半日を学校の体育館で練習をさせてもらっている。県大会ベストエイト以上を目標に取り組んでいるが、盛岡・花巻地区の学校の壁は厚く、一・二回戦敗退が続いている。

百周年を迎えるにあたって、現在のハンドボールコートのある場所に屋内練習場が建設されることになっている。特に冬期間の活動場所の確保に困っていた部が多かったが、これで解消されるであろう。そして、全国大会へ出場するクラブが多くなるよう期待される。

先輩方の築かれた伝統を引き継ぎ、残した実績を上回るよう生徒共々頑張っていく所存である。



す。

これからは創部百周年目指して、さらなる水高柔道部の歴史を、途切れることなく刻んで行く事を望み、またOBとして、水高柔道部の発展に寄与して行きたいと思っております。

(OBよりの寄稿)

弓道部

本校弓道部の歴史はここから始まる。実科高等女学校時代の大正一二年に少女弓道会設置の必要性が説かれ、同年一月二三日に弓道部の設置をみる事となった。以来八五年の歴史を誇る伝統のある部である。昭和に入り「的中よりも射型」「精神の鍛錬」を標榜し、一途猛練習に励んだと記録されている。

戦時中に一時途絶えた弓道部が再び結成されたのは昭和三年で、その後の七年間には男女合わせて五回も全国総体出場を果たすという偉業を達成した。

さて、本校弓道場は昭和四五年の岩手国体の会場として前年三月に新設され、現在に至る。校舎南側の落葉松林の中にひっそりと佇み、四季折々の豊かな景色に囲まれながら集中して練習できるという、恵まれた環境にある。静寂と緊張の中で放つ一射、そして張り詰めた空気を破る「よし」のかけ声。緊張と弛緩、静と動のリズムを一瞬一瞬感じながらの日々の練習。部員にとって道場でのひとききは、的に真剣に向

柔道部

半世紀を超える歴史を刻む水高柔道部

水沢高校創立百周年にあたり、我が水高柔道部の創部はいつなのか調べてみました。古参のOBの話によると、昭和二年ではないかとの事でした。そうすると、今年で創部五六周年を迎えることになり、半世紀を超える歴史を刻んで来た部となります。その間二〇〇人を超える部員が入部し、毎日の稽古に励み、多くの思い出を胸に巣立って行きました。

創部から現在までの各種大会成績は、ほぼ県内止まりの成績ではありましたが、昭和五四年に、及川仁さん(昭和五五年卒)が軽量級個人でインターハイに出場しました。それを祝福し、当時のOBが集まり、時計と部旗を贈呈しております。また、その後毎年一月に、OBの親睦会が開催されるようになり、現在まで途切れることなく三〇年以上続いております。平成十四年には、正式に水沢高校柔道部OB会として発足し、会報を発行するなどの活動をしておりま

す。

さて、私が水高に入学した昭和四九年は、新しい校舎(現在の校舎)の建設が始まっており、ちょうど旧校舎最後の年でした。そのため、三年間稽古場がいろいろ変わりました。一年生の時には、取り壊された旧体育館で稽古をしておりました。部員も少なかったが、かなり広かったように思います。旧体育館が取り壊された後

は、旧校舎の教室の壁をぶち抜き、床に畳を敷いて稽古場にしておりました。かなり細長く、横に並んで打込み等をするには良かったのですが、乱取りをするには、少し狭かったように思います。そして三年生の時に、現在の柔剣道場が完成し、真新しい道場で稽古が出来ようになりました。落成式では、柔道の型を披露した事を覚えております。

稽古した場所は、いろいろ変わりましたが、水高柔道部での思い出は、五十歳を過ぎた今でも変わることなく心に残っております。親睦会に集まったOBの口からも、あの時は誰々が強かった、あの先輩には敵わなかった等と聞くことができます。ただ残念なのは、私の学年の柔道部員は、私一人だけだったので、共に思い出を語る相手がないことです。しかし、たとえ一人だとしても、私が入部したことで、水高柔道部の五〇年以上の歴史を途切らす事なく、現在まで繋ぐ事が出来て良かったと思っております。



き合うのと同時に己自身と真摯に向き合う時間でもある。

先述の岩手国体においては本校弓道部員男女一名ずつが国体選抜メンバーの一員として活躍し、少年男子の部は総合三位、少年女子の部では全国優勝を果たした。また高総体においても昭和が幕を閉じるまでに団体や個人で八度も全国総体に出場し、幾度も決勝トーナメントに駒を進めるといふ素晴らしい成績を収めた。

時代は平成へと突入し、平成五年以降の五年間は男女とも高総体や新人戦において優勝を重ねた。特筆すべきは平成八年の選抜大会である。県予選を突破し東北選抜に出場、そして女子団体・男子個人・女子個人で全国大会へと勝ち進み、そこで優秀な成績を収めた。昭和五七年に始まった選抜大会において本校が全国大会に出場したのは、後にも先にもこの一度きりである。このとき女子団体・個人で出場した菊地孝子さんは、岩手県高体連弓道専門部五十年の足跡『鍊成』に次のように載せている。

「(前略)選抜大会では苦勞しながら東北大会の切符をつかみ、東北大会では、個人戦当日に風邪薬を飲んでまさかのスランプ。個人戦東北予選最下位での全国への切符。翌日の団体戦では、まさかの東北二位。全国に行っても奇跡は続いた。個人四位になってしまった。(中略)国体に意欲を持ったのも、三年間という短い高校での弓道生活で、全国へ行くことの楽しさを知ったからだ。国体を目指してから、今でも大事なたくさんの友人や先生方に会い、時

に怒られ、それ以上にたくさん励ましてもらった。一時は、高校卒業と同時に弓道から卒業しようと思ったが、すごくいいタイミングで弓道部に誘ってもらい、今でも弓道を続けている。(中略)私にとって弓道は既になくてはならないものであり、すべての原点は高校時代にあるといっても過言ではない。弓道に、弓道で出会ったすべての方々に感謝する日々である。」

※全国選抜大会は平成九年に開催され、その年の高総体で女子団体は優勝し全国総体に出場している。

その平成八年からは一年生大会がスタートし、また平成二〇年には県民体が終了した。さらに平成二三年度には全国総体が北東北三県での合同開催となり、弓道競技は岩手県盛岡市が主催となる。

その前年、つまり平成二二年の高総体において、久しぶりに本校からインターハイ選手が輩出された。寺田選手は女子個人で二位となり、単独県開催としては最後になる沖繩総体に出場した。スランプに苦しみながらも実直に練習を重ね、本番では準決勝に駒を進めることができた。大健闘を心から祝福したい。

高校弓道を取り巻く環境は刻々と変化している。水高が百周年を迎え、次の百年に向けて新たに開発するのに合わせて本校弓道部もますます発展するとともに、「的中よりも射型」「精神の鍛錬」を受け継いでいくことを強く誓うものである。

年度	男子顧問	女子顧問	男子個人	女子個人	男子個人	女子個人	男子個人	女子個人	男子個人	女子個人	男子個人	女子個人	男子個人	女子個人	男子個人	女子個人	備考
昭和34	杉山清		男子団体 男子6位(0.5福岡4.1水商5.0黒工5.0岩手1.4関)														
35	杉山清																
36	杉山清																
37	杉山清																
38	中川進夫	皆川守男															
39	中川進夫																
40	後藤正俊																
41	後藤正俊																
42	後藤正俊																
43	後藤正俊																
44	後藤正俊																
45	後藤正俊																
46	小坂宏																
47	千葉紀一	永野陸彦															
48	後藤正俊	永野陸彦															
49	後藤正俊	永野陸彦															
50	千葉紀一	永野陸彦															
51	菊池享	永野陸彦															
52	菊池享	永野陸彦															
53	菊池享	永野陸彦															
54	菊池享	永野陸彦															
55	菊池享	阿部紀文															
56	菊池享	阿部紀文															
57	菊池享	阿部紀文															
58	菊池享	阿部紀文															
59	菊池享	阿部紀文															
60	菊池享	阿部紀文															
61	菊池享	阿部紀文															
62	菊池享	阿部紀文															

剣道部 活動記録

*平成一三年以降の戦績(四位以上)
 平成一三年度 高総体 女子団体二位 [東北大会(三三中)]
 男子個人(千田) 優勝 [全国総体出場]
 新人戦 男子個人(堀籠) 四位
 県民体 男子団体三位
 平成一四年度 高総体 女子団体三位
 新人戦 男子個人(佐藤) 優勝
 県民体 男子団体三位
 平成一六年度 新人戦 男子団体四位
 男子個人(畠山) 優勝
 一年生大会 女子団体二位
 平成一七年度 高総体 男子個人(畠山) 五位
 [東北大会出場]
 新人戦 女子団体四位
 男子個人(長野) 四位
 一年生大会 男子団体二位
 平成一八年度 高総体 男子個人(佐藤) 三位
 [東北大会出場]
 一年生大会 男子団体三位
 女子団体三位
 女子個人(狩野) 優勝
 平成一九年度 選抜県予選 女子団体二位 [東北選拔出場]
 平成二〇年度



一年生大会 男子団体B三位
 女子団体B三位
 平成二一年度 高総体 男子個人(佐々木) 四位
 [東北大会出場]
 新人戦 女子団体三位
 平成二二年度 高総体 女子個人(寺田) 二位
 [東北大会出場]
 全国高校総体女子個人(寺田) 準決勝進出



剣道部

山岳部

〔部活動〕

昭和から平成に変わる頃の本校山岳部は、男とも高総体で優勝するほどの強さであったが、やがて女子の入部が絶え絶えになった。男子が活動を続けていたが、平成一二年に男子に加え女子二名が入部し、翌一三年は女子部員三名、一四年には女子七名に増えた。一五年から翌年にかけては、ここ一〇年の中で部員数が最も充実していた時ではなかったろうか。一五年の高総体には、久しぶりにB隊(女子)にチームとして参加し、その年の新人大会では三位に入賞した。一六年の高総体ではさらに上位を目指すも、体力点で伸ばすことができず、四位に終わった。女子はその年に入部した一年生に引き継がれ、翌年二年生となった新人大会で他の部から応援を借りながらも準優勝を果たした。その勢いで一八年高総体優勝を狙ったが、ここでも体力点が足りず、僅差で優勝を逃した。この準優勝の三年生が卒業した後は、女子の入部が途絶えてしまい、二年はオープン参加さえできない状況に



なっている。一方男子は、一〇位前後が続いており、最近では一七年の七位が最高である。女子は出場校が少ないだけに、優勝の可能性が高い。女子の入部を願ってやまない。

〔運動会シンボル〕

かつて運動会には、目玉の一つとして各軍の陣地にそびえる「シンボル」なるものがあつた。いつの頃からか、山岳部と有志がその係になっており、春休み返上でまず穴掘りから始める。三m四方で田の字に深さ一mの溝を掘り、底から建設用の足場を組む。地上三mほどまで足場を組み上げたあと、外側に金網、段ボールを巻いて写真のように形を整えていく。運動会前日に徹夜で製作にあたることもあつた。そして、グラウンドをはさみ一塁側とライ



ト側で二つのシンボルが対峙する。シンボルの上から見下ろす前年度優勝のリーダーに、果たし状を読み上げるのである。しかし、このシンボルも平成一六年で最後となり、戦国ののぼりへと姿を変えた。

〔昇龍登山〕

夏の恒例行事となった昇龍登山の第一回は、平成一二年であったとされている。当時の山岳部および有志と先生らが、大



学合格祈願のために、中沼コースから焼石岳に臨んだ。以来、ほぼ毎年行われ、平成二十二年は第十回を数える。参加者は毎年三〇人を越し、多いときで六〇人ほどにもなった。平成二〇年六月、岩手・宮城内陸地震のため、焼石岳登山口への国道三九七号線が通行止めになった。それを期に、昇龍登山は岩手の最高峰・岩手山へと場所を移した。

〔歴代顧問とおもな大会記録(平成一二年〜)〕

- | | | |
|--------|------|------|
| 平成一二年度 | 千葉真英 | 鈴木 守 |
| 一三 | 鈴木 守 | 入駒 智 |
| 一四 | 鈴木 守 | 客本雄二 |
| 一五 | 今松正明 | 近藤 孝 |
| | 新人戦 | 女子三位 |
| 一六 | 嶋澤 秀 | 嶋澤貴博 |
| 一七 | 嶋澤 秀 | 嶋澤貴博 |

年度	男子顧問	女子顧問	男子団体	男子個人	女子団体	女子個人	男子団体	男子個人	女子団体	女子個人	男子団体	男子個人	女子団体	女子個人	県民体・県下剣道選手権・岩手総体記念・他	備考
昭和63	菊池 享	稗貴 能彦	リーグ敗退		決勝リーグ(花南)		2回戦								塩竈神社 男女準優勝 個人男女準優勝	
平成1	菊池 享	中目 徹	ベスト16(軽米)	伊達2回戦	リーグ敗退	北條、岩井 2回戦	2回戦	高橋ベスト16	2回戦						塩竈神社 個人男女準優勝 伊達、北條	
2	菊池 享	中目 徹	決勝リーグ(軽米) 1回戦3・2 2回戦1・4 (苦工) ベスト8	岩佐真幸、渡 辺大 2回戦	リーグ敗退	鈴木ルミ 3回戦	1・1								塩竈神社 女子盛二に敗退 個人優勝 海鋒徹哉	
3	菊池 享	中目 徹	ベスト16		ベスト16		ベスト16									
4	菊池 享	中目 徹	1回戦敗退		ベスト8		ベスト8									
5	金田 義彦	武田 純治	リーグ敗退	小澤結4回戦 ベスト16	リーグ敗退	岩井美穂 3回戦	1回戦敗退	渡辺学3回戦 高橋斉宏 2回戦	2回戦敗退	数江久美子 3回戦 岩井美穂 3回戦 及川亜希子 3回戦						
6	菅原 一成	武田 純治	決勝リーグ 敗退	小澤結、塔ヶ 崎真也 ベスト16	リーグ敗退		2回戦敗退	岡部琢3回戦	2回戦敗退	守田順子 3回戦						
7	菅原 一成	武田 純治	リーグ敗退		ベスト16		2回戦敗退		3回戦敗退							
8	菅原 一成	高橋 一成	リーグ敗退		ベスト16		2回戦敗退		3回戦敗退							
9	菅原 一成	高橋 一成	リーグ敗退		リーグ敗退	千葉祐子 3回戦	2回戦敗退		2回戦敗退	千葉祐子 ベスト16						
10	菅原 一成	高橋 一成	リーグ敗退		リーグ敗退		ベスト16		初戦敗退							
11	菅原 一成	高橋 一成	リーグ敗退		リーグ敗退		ベスト16									
12	菅原 一成	高橋 一成	リーグ敗退		リーグ敗退		ベスト8									
13	菅原 一成	小原 太郎	ベスト8				ベスト8									
14	小原 太郎	廣野 泰	ベスト8				2回戦敗退									
15	小原 太郎	廣野 泰	リーグ敗退				2回戦敗退									
16	小原 太郎	廣野 泰	リーグ敗退				2回戦敗退									
17	小原 太郎	廣野 泰	ベスト8				3回戦敗退									
18	小原 太郎	廣野 泰	ベスト16				3回戦敗退									
19	小原 太郎	君成田隆房	ベスト16	大和田 ベスト16		柴田奏絵 ベスト16	3回戦	西塚徹 3回戦	第3位	柴田奏絵 ベスト8						
20	小原 太郎	君成田隆房	リーグ敗退	西塚徹3回戦		柴田奏絵 ベスト16	3回戦	西塚徹 3回戦	リーグ敗退	高野元保 3回戦						
21	菊池 享	古玉 敦	リーグ敗退			千田歩香 ベスト16	2回戦敗退	佐藤、高橋 2回戦	対花北0・5	菅原ベスト16 阿部2回戦						3段合格 福井峻太 阿部美里

新人戦	女子二位
一八	島澤 秀 館澤貴博
	高総体 女子二位
一九	島澤 秀 久保賢治
二〇	島澤 秀 久保賢治
二一	久保賢治 島澤 秀
二二	島澤 秀 小川尚人

水泳部

平成五年に同好会からクラブとなった水泳部はその歴史こそ浅いものの、伝統ある他の運動部と比べてもいさかみ遜色のない成績を残してきた。平成一三年度以降、毎年のように東北大会に出場しているクラブは、部活動のさかんな本校においても貴重な存在であるといえる。平成二二年現在、本校のプールは使用できない状況となっているが、部員は校外のスポーツクラブにおいて自主的な練習を続けている。競技人口の減少に伴い部員数も減ってきているが、まさに少数精鋭という言葉のとおり活躍を続けてきている。

主な成績（高総体県大会六位以上）

◆二〇〇一（平成一三）年 高総体	男子 鈴木 二〇〇 m自由形	六位
◆二〇〇二（平成一四）年 高総体	男子 小野寺 一〇〇 m自由形	五位
	男子 小野寺 一〇〇 m自由形	五位
	女子 信田 一〇〇 m平泳ぎ	四位

◆二〇〇三（平成一五）年 高総体	男子 千葉 一〇〇 m背泳ぎ	三位
	男子 千葉 二〇〇 m背泳ぎ	四位
	女子 小野寺 五〇 m自由形	六位
	女子 信田 一〇〇 m平泳ぎ	四位
	リレー 二〇〇 m平泳ぎ	四位
	リレー 四〇〇 mメドレー	六位

◆二〇〇四（平成一六）年	男子 小野寺 五〇 m自由形	四位
	男子 千葉 一〇〇 m自由形	四位
	女子 千葉 一〇〇 m背泳ぎ	二位
	女子 信田 一〇〇 m背泳ぎ	一位
	リレー 四〇〇 mメドレー	五位
	リレー 一〇〇 m平泳ぎ	四位
	リレー 二〇〇 m平泳ぎ	四位

◆二〇〇五（平成一七）年 高総体	男子 千葉 一〇〇 m背泳ぎ	三位
	男子 千葉 二〇〇 m背泳ぎ	二位
	三浦 一〇〇 m背泳ぎ	五位
	三浦 二〇〇 m背泳ぎ	五位
	木村 五〇 m自由形	四位
	石川 八〇〇 m自由形	六位
	女子 石川 二〇〇 mバタフライ	三位

◆二〇〇六（平成一八）年 高総体	男子 及川 一五〇 m自由形	六位
	男子 木村 一〇〇 m平泳ぎ	三位
	男子 木村 二〇〇 m平泳ぎ	五位
	及川 一〇〇 mバタフライ	六位
	リレー 四〇〇 mフリー	四位

◆二〇〇六（平成一八）年 東北水泳大会	女子 石川 八〇〇 mフリー	五位
	女子 石川 四〇〇 mメドレー	四位
	女子 石川 一〇〇 mバタフライ	三位
	女子 石川 二〇〇 mバタフライ	二位
◆二〇〇七（平成一九）年 高総体	男子 及川 一〇〇 m平泳ぎ	八位
	男子 及川 四〇〇 m自由形	六位
	男子 及川 一五〇 m自由形	六位
	佐藤 一〇〇 m背泳ぎ	二位
	佐藤 二〇〇 m背泳ぎ	四位
	鈴木 一〇〇 mバタフライ	四位
	鈴木 二〇〇 mバタフライ	五位
	木村 一〇〇 m平泳ぎ	三位
	木村 二〇〇 m平泳ぎ	四位
	リレー 四〇〇 m平泳ぎ	四位
	リレー 八〇〇 mフリー	四位
	リレー 四〇〇 mフリー	五位
	リレー 四〇〇 mメドレー	四位

◆二〇〇八（平成二〇）年 高総体	男子 佐藤 一〇〇 m背泳ぎ	三位
	男子 佐藤 二〇〇 m背泳ぎ	二位
	川原 一〇〇 m平泳ぎ	五位
	川原 一〇〇 m平泳ぎ	五位
	鈴木 一〇〇 mバタフライ	二位
	鈴木 二〇〇 mバタフライ	二位
	リレー 四〇〇 mフリー	五位
	リレー 四〇〇 mフリー	五位
	女子 石川 一〇〇 mバタフライ	四位
	女子 石川 一〇〇 mバタフライ	四位
	小原 一〇〇 m平泳ぎ	三位
	小原 二〇〇 m平泳ぎ	三位
	瀬川 一〇〇 m平泳ぎ	五位
	瀬川 二〇〇 m平泳ぎ	五位
	リレー 二〇〇 m平泳ぎ	三位
	リレー 四〇〇 mメドレー	四位

八〇〇 mフリー	六位
四〇〇 mメドレー	三位
女子 小原 一〇〇 m平泳ぎ	三位
女子 小原 二〇〇 m平泳ぎ	二位
瀬川 一〇〇 m平泳ぎ	四位
瀬川 二〇〇 m平泳ぎ	三位

◆二〇〇八（平成二〇）年 東北水泳大会	女子 小原 一〇〇 m平泳ぎ	五位
	女子 小原 一〇〇 m平泳ぎ	六位
	瀬川 一〇〇 m平泳ぎ	六位
◆二〇〇九（平成二一）年 高総体	男子 千田 一〇〇 m背泳ぎ	三位
	男子 千田 二〇〇 m背泳ぎ	二位
	女子 小原 一〇〇 m平泳ぎ	五位
	女子 小原 二〇〇 m平泳ぎ	四位
◆二〇一〇（平成二二）年 高総体	男子 千田 一〇〇 m背泳ぎ	三位
	男子 千田 二〇〇 m背泳ぎ	三位

ウエイトリフティング

『復活』を目指して

執筆にあたり、水高八〇年史を開いた。「ウエイトリフティング部」紹介の欄に、次のように記されている。

「昭和六〇年高総体で初優勝。六二年からは連続して優勝。水高のニューリーダーたる資格十分である。懸念されるのは部員の減少だけ。」

当時執筆された方は、この部の行方を見通していたのだろうか。この「予言」は見事に的中

してしまった。県高総体七連覇の平成五年を最後に、部員は減少の一途をたどり、ついには廃部に追い込まれた。水高九〇年以降の資料に、活動を確認できるものがほとんどない。したがって、ここではウエイトOBの方々なら認めるであろう昭和六〇年代から平成初期の「黄金期」を振り返る。

この「黄金期」は、まさに県下に敵なしの強豪であった。学校対抗戦では県高総体で昭和六二年から平成五年まで七連覇を達成した。この連勝記録は、同競技での最多連勝記録として残ったままである。六〇年の初優勝を合わせた八回の優勝回数も、岩手のウエイトリフティングの中心的存在であった岩谷堂農林（現岩谷堂）高校の一五回に次ぐ優勝回数を誇る。

また、個人戦でも、全国・東北を舞台に活躍した。昭和六〇年五六kg級金井達浩、平成五年五九kg級大沼慶太のインターハイ入賞（いずれも八位入賞）の両名をはじめ、平成七年度まで優に三〇名を超えるインターハイ選手を輩出した。さらに、県の高校記録を樹立する者や大学からスカウトされる者、実際に大学進学後も競技を続け、高い競技力をもって本県の中心選手として活躍する者も現れた。（ちなみに、この「黄金期」のメンバーの中から、県協会員として組織運営や指導に務めるなど、岩手のウエイトリフティング界を支えている者も複数名存在する。）

こうした栄光を生んだ「黄金期」に対し、マナー競技であるが故に、容易に実現できたと

いう見方がある。確かに、全国大会に近いことは競技人口を見ても否定しない。しかし、インターハイ出場には基準記録を越えなければならず、県大会上位入賞で自動的に出場権を得るわけではない。また、競技専門の指導者が着任したこともない中での活動であったこと、懸念された部員減少に対し、その確保に奔走した事実を想起しても、OBの一人として「黄金期」に恥ずべきことは何一つとしてない。それより、こうした実績を有しながら廃部に追い込まれたことに、具体的な方策を講じることができなかったことが残念でならないし、OBとして何もしないことが悔やまれてならない。在学当時の、ウエイトリフティングに対する思い入れに個人差はあるにせよ、自分が所属した部が消滅したとなれば、やはり寂しさを感じるのではないだろうか。

水高九九年目、生徒総会において特例として同好会発足が承認された。現在、一・二年生計六名の生徒諸君が、復活と文武両道を目指し、「黄金期」よりも立派に活動している。彼らに続く水高生が多く現れ、いつの日か、第二の「黄金期」が到来することを期待して止まない。

※県高校総体学校対抗の主な成績

優勝 八回

昭和六〇年、昭和六二～平成五年 準優勝 四回

昭和五五年、昭和五七年、昭和六一年、平成六年

※インターハイ入賞者

昭和六〇年（石川県開催）五六kg級
 今井達浩 記録 トータル一八七・五kg
 平成 五年（栃木県開催）五九kg級
 大沼慶太 記録 トータル二〇二・五kg
※県高校記録保持者
 九〇kg級 吉田新一（昭和六二年）
 S一〇七・五kg J一三二・五kg
 T二四〇・〇kg
 一〇〇kg級 及川敬幸（平成四年）
 J一一二・五kg
 五九kg級 大沼慶太（平成五年）
 J一一二・五kg T二〇二・五kg

バレーボール部

水沢高等女学校時代、昭和四年陸上部が創設され、陸上競技部は運動部の中核として、バレー競技も行われていた。翌年の昭和五年、バレーボール部は、陸上競技部より独立し創部された。七月に行われた排球競技大会が、岩女において開催され、本校、岩女、関女の三校のリーグ戦による初の試合を行った。一〇月に県下女子高等学校大会において二回戦岩女と対戦し、激戦を演じた末、敗退した。（六〇年史より）

水沢高等学校時代、昭和二三年、男女共学となり男子部も創部され活動が行われた。

昭和四五年、遠山監督（現在、岩手県バレーボール協会名誉会長）、OBの齋藤コーチと



理想の指導体制が確立され、本校バレーボール部の長年の夢が実現した。当時は現在と違いオープンコート（屋外）で行われ、準決勝、対黒沢尻北戦を危なげなく勝ち進み、決勝は対盛岡一戦。盛岡一にリードされ続け、いやなムードであったが、相手のポジションナルフォルトで流れは一気に水沢ベース。そのまま第一セットを先取りし、次のセットも押切り、高総体初優勝を果たした。翌年の昭和四六年も準決勝で黒沢尻工、決勝で一関一を破り二連覇を果たした。

その後、昭和五三年、五四年、五七年と選抜大会、新人戦で優勝を果たし、強豪の伝統校として確立された。しかし、高校総体の優勝を果

すことが出来ず、一五年を待つこととなった。そして、昭和六一年、高総体の決勝では麻生一関を圧倒、一五年ぶり三度目の優勝を果たし、熊谷監督と一緒に喜びを分かち合った。部員達は努力に努力を重ね、厳しい練習で磨き上げた速攻がチームの特徴であった。全国大会の山口インターハイでは東北大会においてキャプテンが負傷し、その回復が遅れ不本意な成績であったが、喜びの一年であった。

平成に入り県大会に出場するものの上位の壁は厚く、平成五年度に男子がベスト8、平成一年度新人大会三位にとどまった。

平成二二年度より男子部に、高田高校女子バレー部を何度も全国大会に導いた村上監督が就任し、「常勝水高」を目標に指導体制が確立され、県のトップレベルで戦えるチームが作り上げられた。特に平成一五年度の高総体では、準決勝で優勝した盛岡南に1-2と惜敗したが、三位決定戦で遠野に2-1と快勝し、東北大会出場を決めた。宮城県で行われた東北大会では、一回戦日大山形と対戦し、序盤善戦したものの0-2で惜敗した。

大会成績は、男子が昭和二四年から始まった高総体では、優勝三回（昭和四五、四六、六一年度）、準優勝三回（昭和五四、五八年度、平成元年度）、昭和二二年から始まった県民体育大会では、優勝二回（昭和四五、四六年度）、昭和二八年から始まった新人大会では優勝一回（昭和五三年度）、昭和四五年からされた選抜優勝大会（春高バレー）では、優勝二回（昭和

四七、五四年）、準優勝三回（昭和五三、六一一年、平成二年）を誇っている。昭和六一年以来、あと一步のところまで、全国大会出場のチャンスはあったが、水高バレー部の伝統は継承され、水高二世紀目の活躍が期待される。

女子は、昭和五年の創部以来、各大会ともに優勝の記録が残っていないが、自分を値踏みせず、直向きに努力する姿勢は、今後とも継承され、実を結ぶときが必ずくると信じている。

（歴代顧問と主な大会の記録平成一三年度〜平成二二年度まで）

平成一三年度

男子 村上文昭 高総体ベスト8（優秀選手 小嶋克也）、県民体三位、新人戦三位（優秀選手 村上雄樹）、選抜大会三位

平成一四年度

男子 村上文昭 高総体ベスト8（優秀選手 千葉健司）、県民体ベスト8、新人戦三位（優秀選手 村上雄樹）、高知国体出場（村上雄樹）、選抜大会ベスト8

平成一五年度

男子 村上文昭 高総体3位（優秀選手 明達也）東北大会出場、県民体3位、新人戦一回戦敗退

女子 小原建辰、鎌倉道彦

新人戦一回戦敗退

平成一六年度

男子 村上文昭 高総体一回戦敗退、県民体

ベスト8、新人戦ベスト16、選抜大会ベスト8

平成一七年度

男子 菅原桂吾 高総体二回戦敗退、新人戦二回戦敗退
 女子 小原建辰、鎌倉道彦 高総体ベスト鎌倉道彦、新人戦二回戦敗退

平成一八年度

男子 鎌倉道彦 高総体ベスト鎌倉道彦、新人戦一回戦敗退
 女子 小原建辰 高総体ベスト16、新人戦二回戦敗退

平成一九年度

男子 鎌倉道彦 高総体二回戦敗退、選抜大会ベスト16
 女子 小原建辰 高総体二回戦敗退、新人戦二回戦敗退、選抜大会一回戦敗退

平成二〇年度

男子 鎌倉道彦 高総体二回戦敗退、新人戦三位（優秀選手 遠藤 豊）、選抜大会ベスト8（優秀選手 遠藤 豊）
 女子 小原建辰 高総体二回戦敗退、新人戦ベスト16、選抜大会二回戦敗退

平成二一年度

男子 利府 崇、鎌倉道彦 高総体二回戦敗退、新人戦ベスト8（優秀選手 千葉王義）、選抜大会一回戦敗退
 女子 小原建辰 高総体二回戦敗退、新人戦

ベスト8（優秀選手 大谷結香）、選抜大会二回戦敗退
 平成二二年度
 男子 上佐博司 高総体ベスト16、選抜大会ベスト8（優秀選手 清水慧）
 女子 久保賢治 高総体二回戦敗退、選抜大会ベスト16



音楽部

音楽部員は平成二二年度現在、男子五名、女子一八名の計二三名である。「輪・和のある、心をゆさぶる合唱」をモットーに、東北大会出場を目標にして、歌うことの楽しさを感じなが

平成21年度岩手県高等学校総合文化祭
美術工芸展 絵画部門 特賞



「追憶」 那須川

- 平成一六年度 絵画部門 特賞三名(小野寺、菊地、佐藤) 全国高等学校総合文化祭出展(小野寺)
- 平成一七年度 絵画部門 特賞四名(小野寺、佐藤、高橋、高橋) 全国高等学校総合文化祭出展(佐藤)
- 平成一八年度 絵画部門 特賞四名(菊地、羽藤、高橋、有原)
- 平成一九年度 絵画部門 特賞二名(羽藤、伊藤) 立体部門 特賞一名(羽藤)
- 平成二〇年度 絵画部門 特賞三名(伊藤、高橋、菅野)
- 平成二一年度 絵画部門 特賞三名(那須川、新川、小野寺)

書道部は本校創立の頃から活動していた。当時は賞を狙って作品を書くわけではない。もっぱら書法、精神性向上のための地道な日々の鍛錬に少人数でいそしんでいた。

しかし昭和二〇年代頃からは、よき指導者に恵まれたこともあり、より意欲的な活動をするようになっていた。日々の猛烈な練習は勿論のこと、種山ヶ原の麓の木細工小学校、正法寺等での練成合宿の記録もある。その後は大沢温泉、近隣江刺の愛宕公民館でも夏合宿をし、技術の向上を目指している。

そうした活動により、県内外の各種大会・コンクールで多数の上位入賞を得た。昭和二五年の岩手県高校書道展で森田敬一が最高賞受賞、また昭和五七年の第六回全国高総文祭栃木大会に菅原奈保子、昭和六一年の第十回全国高総文祭大阪大会に佐藤知子が岩手県代表権を得、出品・参加している。

〈近況〉

平成二一年度までは及川啓子先生が、平成二二年度からは松戸靖先生が顧問として書道部を指導。校内書道室での練成の他、盛岡に出かけての対外活動・他校との交流を重ね、平成二二年度の第三三回岩手県高総文祭では優秀賞六・奨励賞二点の大量入賞となり県のトッププレ

書道部



第50回定期演奏会の合同演奏

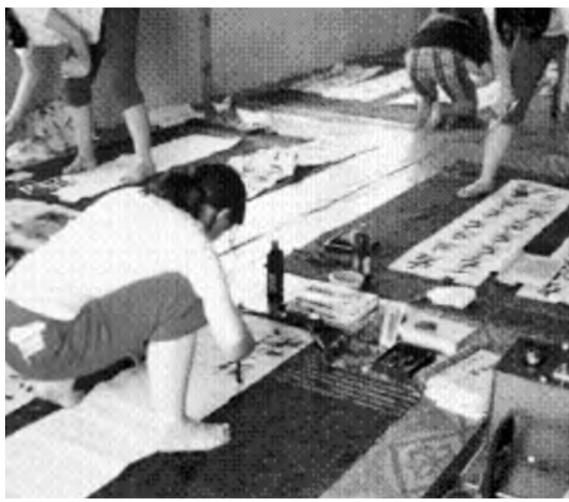
振り返りながら、その重みを感じ、OB・OGは高校時代を懐かしみながら共に演奏することができた。本番に向けて、合同練習会を何度も行い、当日は現顧問の中村桂子、旧顧問の佐々木和哉氏、OBの佐々木幹雄氏の指揮で「風が」「早春」「河口」「鷗」「Domine Jesu」「アヴェ・ヴェルム・コルプス」「ハレルヤ」を歌った。「心のハーモニ」が受け継がれていることを現部員もOB・OGも実感した、素晴らしいステージになったのではないかと、これからの先輩が築いた伝統を受け継ぎ、聴いて下さる方の心に届くような演奏をしていきたい。

美術部

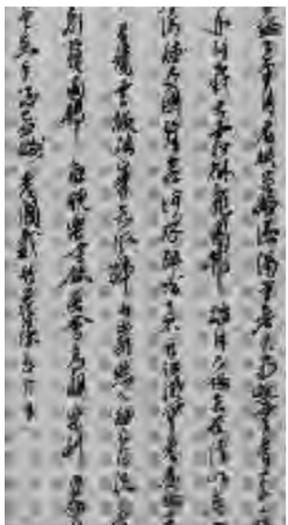
美術部の年度当初の活動は運動会のバック絵制作である。紅軍、白軍を象徴するバック絵はベニヤ板一二枚を繋ぎ合わせた大きなもので、原案の構想から完成まで部員総出で一ヶ月以上を要する。その後は個人の創作活動となり、熱心に取り組んでいる。創作の中心は油絵で、三〇〇号サイズの大きなキャンバスに半年以上の書き込みを重ね、深く奥行きのある作品へと仕上げていく。また、本人の希望によっては基本をしつかりと身につけた上で、立体彫刻やデザインに取り組むこともある。奇をてらわず基本を大切に丁寧に取り組んだ作品は、岩手県高等学校総合文化祭美術工芸展においても高い評価を得ており、全国高校総合文化祭へも出展されている。以下は主な受賞作品である。

- 平成一三年度 絵画部門 特賞三名(平澤、田中、小野寺)
- 平成一四年度 絵画部門 特賞三名(菊池、佐々木、八重樫) 全国高等学校総合文化祭出展(菊池)
- 平成一五年度 絵画部門 特賞三名(菊地、佐藤、八重樫) 全国高等学校総合文化祭出展(菊地)

ベルの好成績であった。そのうち平成二三年度の第三五回全国高総文祭福島大会の岩手県代表として菊池恵実が選出されている。水高書道部の県代表は実に二五年ぶり三回目となる。



昭和50年愛宕公民館での夏合宿、2泊3日の自炊であった



第三十五回全国高総文祭福島大会の
岩手県代表作品 菊池恵実

ESS部

この一〇年のESSの活動は、あまり大きく変わらず、私たちのミーティングに英語を話す世界を持ち込むというクラブの目的はそのままである。様々な会話や試合や映画、多くの活動を通して、部員達は積極的に英語を使うようにしている。平成十一年度には、このESSの小さな英語の世界を地域に持ち出した。地域に飛び出し、英語の普及を行うという活動である。これは、ESSのこの一〇年の活動の中で、お

そらく最も注目される活動の一つとなったはずだ。部員達が、部顧問である外国語指導助手のコーン・チャールズ先生と一緒に奥州市内の小学校を訪問し英語の出前授業を行ったのである。参加した部員は、それぞれの授業でコーン先生のアシスタントを務めた。異なるテーマを掲げ、英語を使った様々なゲームや歌を小学生に教えた。南都田小学校から始まったこの英語出前授業の最初のテーマは、「色を中心にして服装を説明しよう」。二校目の愛宕小学校では、「体を表す言葉」。三校目は水沢南小学校で、「外国を経験しよう」というテーマで行われた。小

-ESS(English Speaking Society)-Activities

The past few years of ESS have not seen many major changes. The club's goal of bringing the English speaking world into our little meeting place has remained the same. Through a variety of conversations, games, movies, and many other activities we strive to use English in a proactive manner. Last year, we were able to bring a little of our English speaking world to the surrounding community. Perhaps one of the most significant activities in the club's short history was promotion of English through elementary school visits last year. ESS members along with the ALT club sponsor visited several elementary schools in Oshu city and conducted special English classes (出前授業). In each class several members assisted the ALT in teaching the elementary students using English. Each class had a different theme and everyone enjoyed teaching and learning English through a variety of games and songs. The first visit was Natsuta Elementary School and the theme was describing the kinds of clothing we wear with an emphasis on colors. The second visit was Atago Elementary School and the theme was "body parts". The third visit was Mizusawa Minami Elementary School and the theme was "experiencing other countries". We hope that the ESS club will be able to continue such "outreach in English" projects in the future. Another significant development was the creation of the club's first English blog called "Flying Dragon Stories". Throughout the year each member wrote a short diary entry. Feel free to have a look at the website:

<http://flyingdragonstories.blogspot.com/>
Additionally, the club continued the tradition of sending club members to compete in the English Oratorical Contest. For this year two members worked hard to write their own original English speeches and then memorize them for the contest.



学生はもとより、部員自身が、英語を教えたり、学んだりすることを楽しむことができた。今後もこのような「英語を広める」活動を続けていきたいものである。
また、「Flying Dragon Stories (飛龍物語)」という英語ブログを始めたのも近年の活動のもう一つの目玉である。一年を通して、メンバー一人一人が、短い英語日記を綴っていくものである。誰でも閲覧可能である。
例年の活動として、岩手県高等学校英語弁論大会への部員の参加も引き続き行ってきた。平成二一年度は、二名の生徒が堂々と発表してきた。

茶華道部

この十年間の活動は大きく変わらず、現在二〇一〇年まで受け継がれている。茶道と華道それぞれの専門家であるお二人の外部コーチの指導のもと、活動している。初心者生徒たちがコーチの熱心なご指導によって、伝統文化の基本を学び、飛龍祭でその練習成果を披露している。

四月の部勧誘を経て、入部した一年生は週一回ずつ行われる茶道と華道の両方のお稽古に参加し、二年生からは両方あるいはどちらか一方のお稽古を選択して活動している。

飛龍祭は、浴衣姿でお点前を披露する「晴れ舞台」で、夏休みには特訓をして臨む。毎年、



三百人近くの来場者を迎えている。例年二十から三〇人の部員を抱えている茶華道部であるが、この十年で男子の入部は二名であった。

歴代指導者・役員(二〇〇二〜二〇一〇年)

二〇〇一年〜二〇一〇年
茶道指導者 樋口 博代先生(裏千家)

二〇〇一年〜二〇〇二年
華道指導者 安部 優子先生(小原流)

二〇〇二年〜二〇一〇年
華道指導者 佐藤 清子先生(小原流)

二〇〇一年〜二〇〇二年
部長 佐藤 美和子

二〇〇二年〜二〇〇三年
部長 日置 歩

二〇〇三年〜二〇〇四年
部長 成田 明日香

二〇〇四年〜二〇〇五年
部長 青木 萌

二〇〇五年〜二〇〇六年
部長 斎藤 詩織

二〇〇六年〜二〇〇七年
部長 千葉 温子

二〇〇七年〜二〇〇八年
部長 佐々木 啓美

二〇〇八年
部長 及川 好

二〇〇九年
部長 高橋 由紀子

二〇一〇年
部長 鈴木 智美美

二〇一〇年
部長 吉田 花菜子

二〇〇八年〜二〇〇九年
副部長 千葉 彩恵

二〇〇九年〜二〇一〇年
部長 後藤 茜
副部長 及川 一紗

ノースカロライナ交流事業

これまでも、県南地区茶道討論会や交流会に参加するなど他校との交流を行ってきた。

その中でも、二〇〇九年のノースカロライナ州立理数高校生が来校した際の茶道部としての交流会では、生徒達が、春休み返上で準備に携わった。部長、副部長が中心となって、単にお茶を飲ませるだけでなく、道具の説明やお茶の説明、お茶の点て方を体験してもらうように工夫をした。英語台本やカードを準備して、英語でプレゼンテーションを行い、互いに楽しい時間を過ごすことができた。



演劇部

一 歴史

古い資料が残っていないので、はっきりしたことは分からないが、岩手県高校総合文化祭や高校演劇協議会の県大会が行われるようになる以前から本校には演劇部があり、合同発表会で最優秀に選ばれるなど、活発な時期があったようである。約五〇年程前、演劇部に所属していた高橋瑛子さんは、卒業後、東京でプロとして演劇の道へ進み、その後水沢に拠点を置いて今もなお、役者や演出などの演劇活動を行い、地元の関係者のリーダー的存在となっている。その他にも現在も積極的に演劇活動を行っている本校の卒業生は何人もいる。写真はその一人、小原優子さんの水高時代の発表会の時のものである。

昭和五〇年に初めて岩手県高校演劇協議会の県大会が行われ、その時に地区代表として本校の名前がある。その後、第八回、九回、一五回、二〇回に名前が載っている。その後、一二年間の間、名前が載っておらず、部員が全くいない状態もしばらく続いていたようである。

二 最近の活動状況

平成一八年、三年生が卒業し、部員数〇かと思われた時、新入生が一〇名入部し、活動が活発になる。地区大会や定期公演も好評であった。翌年、更に七名の入部があり、同年地区大会で高い評価を受け、一三年ぶりに県大会への出場を果たし、優秀賞を受賞する。そしてその翌年

の二〇年には県大会でも上位三校の代表校に選ばれ、ついには東北大会への初出場を果たした。東北大会では、優良賞であった。

その年は新入生が四人であったが、途中で二人に減り、現在は二年生が五人、一年生は一人である。三年生は活動を続けたとしても、進路の関係で一〇月の県大会までは続けられないことがわかってるので、本校の演劇部ではほとんどの三年生が四、五月の定期公演を最後に引退してしまう。その後も、残された数少ない部員でなんとか頑張っしてほしいものである。

胆沢や前沢や金ヶ崎では市民劇場が盛んで、胆沢ではさらに子供ミュージカルの活動もある。地元の演劇活動の関係者で本校を応援してくれる方も多い。恵まれた環境にあるはずなのだが、新入生の入部が安定せず、部員不足が一番の問題である。

三 最近の大会成績（県大会以上）

○平成一九年度

岩手県高校演劇発表大会 優秀賞

（上演作品）「七人の部長」越智優作

（顧問） 笠川明香・千葉昌子

（部長） 菊池佳奈

○平成二〇年度

東北地区高校演劇発表会 優良賞

（上演作品）「サチとヒカリ」越智優作

（顧問） 笠川明香・千葉昌子

（部長） 及川千尋



秘密作戦計画No.1
「よっここに落とし穴掘ってよ、それから……」
「まてまて、ここの上に口をぬってそして……」
「お前ら甘い甘い、この下に原爆しかけて……!？」

写真部

写真部の歴史

創部の時期は定かではないが、昭和三十一年の生徒会会計予算に写真部八〇〇〇円とある。また、生徒会誌「みずこう」の部紹介の記録は七号（昭和三十三年）に始まる。その年の文化祭では二室で五〇点余を展示、東北電力、藤田写真館から額を借用したと記録にある。翌三四年度は、モニタージュ写真の研究、暗室操作講習会が行われた。モニタージュ写真の研究やヒルターの研究が写真部の研究テーマとして四〇年代中頃まで続いた。昭和三五年には全日本学生



チューホフ作 結婚の申込み 昭和43年・44年



昭和43~45年演劇部在籍チューホフ“結婚の申込み”小原優子



2008年度最優秀賞『雨上がる』

写真連盟に加入したとあるが、二〇一〇年の現在はそのような団体はない。

部としての主な活動には、春四月、五月の新入部員歓迎撮影会がある。六原農場（昭和三五年）、厳美溪（昭和三七年）、平泉毛越寺（昭和四四年）などで行ったとの記録があるが、近年は安・近・短で水沢公園などが主流となっている。また、かつての写真部の伝統的な活動として大運動会での写真撮影と写真の販売がある。これは昭和三〇年代から昭和五八年まで続いた。運動会で写真部員が撮ったスナップ写真などを校内に掲示し、注文をとるものである。全校生徒から一五〇〇枚ほどの注文があり、夏休み前までかかって焼き増し作業を行ったこともあったという（昭和五四年）。五九年には部員が四人と少なく、現像の失敗、写真の質が悪いという事で写真は撮ったものの焼き増ししての販売は行わないことになった。それ以来、運動会での写真販売はされなくなった。

昭和五六年七月には岩手県高等学校文化連盟



2007年度最優秀賞『親父の夏』

が結成され、一〇月には一五専門部の一つとして写真専門部ができて、その年から岩手県高文連主催の写真コンクールが始まった。この年は七点応募して一点が佳作で入選している。昭和六一（一九八六）年には全国高等学校文化連盟が発足し、県コンクールでの入賞作品の中から全国高等学校総合文化祭への推薦が決められるようになった。水高写真部は五六年当初からの写真コンクールには毎年出品し、優秀賞、優良賞などを度々受賞している。なかでも特筆すべきは平成一九年度、二〇年度の二年連続で県コンクールにて最優秀賞を受賞し、全国高等学校総合文化祭に県代表として出品した富士菜都美さんの作品がある。平成一九年度は「親父の夏」、平成二〇年度は「雨上がる」である。

（いずれもデジタル、カラー作品）
 なお、平成二二年度は藤原綾さん（二年）の「左右対称（シンメトリー）」が優秀賞に輝いた。今後の活躍が期待される。

デジタル写真が高校生の写真コンクールなどで解禁となった二〇〇三年（平成一五年）以降は、急速にデジタルが主流となった。本校でもそれまで行っていた銀塩モノクロ写真からデジタルカラー写真に移行。カメラ、プリンターなど機材を数年にわたって一新することとなった。全国の高文連写真専門部では、解禁の数年前、デジタル写真について様々な考え方があり写真とは認めがたいなど解禁に反対する意見もあったようだ。しかし、二〇〇六年（平成一八年）にはコニカミノルタがフォト事業から撤退、ニコンのフィルムカメラの見直しなどが相次ぎ、写真産業界の地図が大きく変わった。今日（二〇一〇年）ではフィルムカメラの製造が限られており、全国的な写真コンテストの出品作品の六〇％はデジタルという。（第三三回全国高等学校総合文化祭写真・顧問会議基調発題から）
 平成二二年度からは、「夏季写真コンテスト」（毎年六月中旬実施）が県高文連写真専門部主催事業として実施することとなった。これは、銀塩・デジタルの別を問わず、より高度な技能や表現力が求められるモノクロ写真に限定したコンテストを新設し、生徒の技能向上を図っていくことを主目的にしたものである。こうしたコンクールを契機に岩手県内各高校及び水沢高校写真部の技能向上が図られるものと期待される。

吹奏楽部

定期演奏会五〇回の節目

吹奏楽部は「魂のハーモニー」をスローガンに、合奏練習を平成九年に改築された部室「奏龍館」で、個人・パート別練習を部室周辺の松林や「水龍館（セミナーハウス）」で行っている。

近年吹奏楽コンクールの地区予選が胆江地区大会から一関・両磐地域を含めた県南地区大会へ合併され県大会への壁が高くなり、また県大会のレベルも年々上がってきているため、近年は県大会金賞までたどり着けない年が続いているが、県大会金賞・東北大会出場をめざし毎年運動部に負けない練習量をこなして努力している。

毎年奥州市文化会館で行われる定期演奏会では、近年は応援団リーダー等の部外生徒をキャストにした寸劇仕立ての演出が恒例の名物となっている。平成二二年度は第五〇回を迎えた記念企画として卒業生で現在プロで活躍するトランペット奏者岩淵重紀氏をゲストに迎え、盛況に終わった。

今後も演奏会では地域の人々により深い感動と喜びを贈り、コンクールでは説得力のある高い技術を習得し、さらなる音楽の高みを目指す。

当時の文芸部の主な活動は、校友会誌の発行、文芸音楽会、名士の講演会の開催、図書部活動の充実を図ることと多岐にわたっていた。

校友会誌は、おそらく現在の生徒会誌にあたる役割を担っていたものと思われる。八〇十年誌によると、昭和六年創立二〇周年記念号には五〇〇部を印刷し、会員間の交流を図ったと記載されている。

二 現在の文芸部活動

現在は文化部として活動している。組織としては岩手県高等学校文化連盟の文芸専門部に登録し、岩手県高校生文芸コンクールへの応募。さらには全国高等学校文芸コンクールへの応募などを目標に活動している。

平成一六年に文芸部誌「煌」（きらめき）を創刊。製本だけを印刷所に依頼し、一〇〇部を発行した。

創刊号の「煌」は、岩手県コンクールで優良賞を受賞し、さらには前述の全国大会においても、初の応募で奨励賞を受賞する快挙であった。「煌」の発行は年一回。平成一七年第二号からは、広告掲載などそれまでの手刷り印刷の「夢想」（むそう）の年二回〜三回の発行と併せて充実した活動を行っている。

活動は「煌」の発行が年一回。部誌への掲載を目標に短歌や俳句の月例会、個人作品の執筆などが主な内容である。

三 大会成績（各大会優良賞以上）

平成一六年度
 顧問 鎌倉道彦・八重樫久美子

部長 菅野 晴香

岩手県高等学校文芸コンクール
 文芸部誌部門 優良賞『煌一号』
 小説部門

優秀賞「白黒時代」 二年 坂田真美
 優良賞「ほうき星」 二年 菅原 悠
 俳句部門 優良賞 二年 菊地祥子

一六年度全国高総文祭青森大会代表
 第一九回全国高等学校文芸コンクール
 奨励賞『煌一号』

第四回全国高校生童話大賞（富士大学主催）
 銅賞「空色スケッチ」 二年 石川 朋
 平成一七年度
 顧問 八重樫久美子（二二年度）
 部長 高橋侑子

岩手県高等学校文芸コンクール
 文芸部誌部門 優秀賞『煌二号』
 短歌部門 最優秀賞 三年 石川 朋
 児童文学部門優秀賞「お稲荷神光」

小説部門優秀賞「南十字星の下で」
 優秀賞「月の鏡」 三年 坂田真美
 俳句部門 優良賞 三年 石田真理子
 第二〇回全国高等学校文芸コンクール
 奨励賞『煌二号』

平成一八年度
 部長 長谷川 知子
 岩手県高等学校文芸コンクール
 文芸部誌部門 優良賞『煌三号』

文芸部

一 歴史

文芸部の歴史をたどると、岩手県立水沢高等学校校友会会則が大正一五年に改正され、さらに昭和二年、校友会組織分掌として現在の委員会活動に当たる形で創設された。



第50回定期演奏会

児童文学部門 最優秀賞

「スカイクリーナー」 三年 高橋侑子
小説部門 最優秀賞「机上の夢」 三年 高橋菜美

優秀賞「僕らの未来」 三年 高橋侑子

平成一九年度

部長 及川真梨子

岩手県高等学校文芸コンクール

文芸誌部門 優秀賞 『煌四号』

詩部門優秀賞「ゲシュタルト崩壊」

三年 羽藤聖美

小説部門「いつかよりおだやかな発酵」

二年 塩原拓人

第七回全国「高校文芸誌」コンクール

(梅光学院主催) 佳作

第二二回全国高等学校文芸コンクール

奨励賞「煌四号」

平成二〇年度

部長 巽岩重紀

岩手県高等学校文芸コンクール

文芸誌部門 優秀賞『煌五号』

児童文学部門 優秀賞 「かんだの夢」

三年 巽岩重紀

小説部門優良賞「共有された記憶」

二年 北村明夏

詩部門 優良賞「何某」一年 北村明夏

「世界終末時計」

一年 佐藤友映

第二三回全国高等学校文芸コンクール

奨励賞「煌五号」

平成二一年度 部長 北村明夏

岩手県高等学校文芸コンクール

文芸部誌部門 優秀賞『煌六号』

児童文学部門 最優秀賞「花神の壺」

三年 巽岩重紀

小説部門 優秀賞「サーカス」

二年 北村明夏

平成二二年度全国高総文祭宮崎大会県代表

第二四回全国高等学校文芸コンクール

文芸部誌部門 優良賞『煌六号』

小説部門 優良賞「サーカス」

二年 北村明夏

平成二二年度

第二五回全国高校生文芸誌コンクール

文芸誌部門 優良賞『煌七号』

小説部門 優良賞 三年 北村明夏

「キャッチボール」

岩手県高等学校文芸コンクール

文芸誌部門 優秀賞 『煌七号』

小説部門 優秀賞 三年 北村明夏

「キャッチボール」

詩部門 優秀賞 三年 佐藤友映

短歌部門 優良賞 二年 菊池美紀

賞状

文芸部誌部門優良賞

岩手県立水沢高等学校

文芸部 殿

あなたは第二四回全国高等学校

文芸コンクールにおいて頭書の

成績をおさめられましたここに

これを賞します

平成二十二年十二月十九日

社団法人全国高等学校文化連盟

会長 藤原正義



囲碁将棋部

囲碁将棋部活動報告

顧問 上 佐 博 司

現在の部員は三一名である。活動内容は囲碁将棋を指すことであるが、将棋を愛好する者が多い。本を購入し、独学したものを互いに教えあい、切磋琢磨している。取り組みが熱心で棋力向上の著しい者も多い。初心者から始めて、三年でアマ二段になった部員もいる。

今年度(二一年度)の岩手県大会(将棋)は

予選敗退で、全国大会への出場は逃したが大会ではキャプテンを中心に健闘した。個人戦では千葉茂仁が三位となった。先を読む力に優れ、冷静な着手で勝ち上がったがもう一歩及ばなかった。将棋はもう一つ大きな大会があり、竜王戦という個人戦がある。全国までつながる大会だが、上位進出を果たせなかった。囲碁選手権については予選敗退であった。

新人戦についてはB級に参加した。二位であった。力はあるので、次はA級で上位を狙いたい。囲碁については人数不足と棋力不足から参加を見合わせた。

平成一三年度

岩手県高等学校将棋大会

団体男子 優勝

団体女子 優勝

岩手県高等学校囲碁選手権大会

団体女子 優勝

新人戦(将棋) 県大会

団体女子 優勝

平成一四年度

岩手県高等学校将棋大会

個人女子 菊池 優勝

岩手県高等学校囲碁選手権大会

平成一五年度

個人男子 永澤 二位

菊池 三位

岩手県高等学校囲碁選手権大会

団体男子 三位

新人戦(将棋) 県大会

団体男子 二位

平成一七年度

岩手県高等学校将棋大会

個人男子 田内遼 三位

竜王戦(将棋) 県大会

個人男子 田内 三位

岩手県高等学校囲碁選手権大会

団体男子 三位

新人戦(将棋) 県大会

個人男子 田内 三位

平成一八年度

岩手県高等学校囲碁選手権大会

個人男子 田内 ベスト8

新人戦(将棋) 東北大会

個人男子 田内 ベスト4

竜王戦(将棋) 県大会

個人男子 田内 二位

竜王戦(将棋) 全国大会

個人男子 田内 ベスト16

新人戦(囲碁) 県大会

団体男子 三位

平成一九年度

岩手県高等学校将棋大会

個人男子 優勝

全国県高等学校将棋大会

個人男子 五位

竜王戦(将棋) 県大会

個人男子 田内 優勝

竜王戦(将棋) 全国大会

個人男子田内ベスト16

新人戦(将棋) 県大会

団体 男子三位

個人男子 千葉 七位

東北大会出場

平成二〇年度

岩手県高等学校将棋大会

団体男子 ベスト4

個人男子 菊池 三位

平成二一年度

岩手県高等学校将棋大会

団体男子 予選敗退

個人男子 千葉 三位

一三年度に顕著な活躍がある。県大会(将棋)で男女ともに優勝し、全国大会に出場している。また、県大会囲碁選手権でも女子団体で優勝したので三冠を勝ち取ったわけである。続いて一四年度以降は主に個人の活躍が目立つ。特に一九年度将棋の全国大会で五位となった田内がめざましい活躍であった。

フォークロック同好会

部史、正確には同好会史を書くために過去の記念誌や生徒会誌に目を通して目を通しているが、明確な記録が残っていないのが現状である。おそらく今と同様で、飛龍祭の時に普段は運動部や他の文化部に所属している生徒が、グループを組んでステージで発表する形であったと思われる。演奏のレベルは相当高く、プロ並みのグループもあったようである。短期集中の練習で仕上げるところは、昔も今も水高生のポテンシャルの高さを感じるころである。

過去の記念誌によると、昭和五二年のところに「フォーク研究同好会」という名前で記載されている。また昭和六〇年前後の記録によると「映画部」「漫画研究同好会」さらには「マジック研究会」など、今では存在しない部や同好会もあった。名前から判断すると、高校というよりは大学のサークルのようであり、自由な校風が伺える。文化系同好会が盛んなのは、当時文化部専用の部室棟のようなプレハブ長屋がプールの奥にあったことが挙げられる。しかし志学館完成の翌年に取り壊しになったようである。当時文化祭は三年に一度の開催であり、映画部による自主制作映画の発表はレベルが高く、好評を得ていたようである。また生徒総会で認証されて誕生したマジック研究会は、後に奇術研究会と名前を変えているが、文化祭での演技や福寿荘への畏敬演技など熱心に活動して

いたようである。

昭和六〇年前後のフォーク研究会の活動は、運動会においても発表を行っていた。今では信じられないが、グラウンドでの演奏もあったようである。文化祭においては現在と同様、第一体育館、または第二体育館で一般公開の中行われていた。その当時流行したBOOWY、BUCK-TICKから洋楽のBRIAN ADAMSまで幅広いジャンルの演奏を披露していたようである。当時は練習スタジオなどはなく、誰かの自宅やガレージなどで練習を行っていたようである。服装やメイクが派手で注意を受ける者がいたのも事実である。だがクオリティーの高い演奏を披露し、大いに盛り上がった。なお、現在と同様、同好会に属している者と有志参加者による構成であった。さらに現在も行われていない予餞会においても演奏する場面があり、その最後においては全員で「心の旅」や「HEY JUDE」の合唱が行われていた。

その後、年代は不詳だがフォークロック同好会と改名している。部員が全くいない名前だけの時もあり、廃部の計画もあった。そういう中で、平成一三年度に盛岡四高の県高文連事務局が高総文祭の協賛部門として第一回軽音楽発表会を開催した。その後、平成一七年度の第五回軽音楽発表会から、軽音楽は正式な専門部となり、年々参加する高校が増加していった。平成一九年度の第七回軽音楽発表会で水高は初参加を果たした。参加したグループの名前は「水沢高校軽音楽同好会」であり、クオリティーの高

いオリジナル曲で挑み、優秀賞に輝いた。翌年の第八回発表会においては、メンバーは次の世代の三年生であるが、優秀賞に輝いた。平成二一年度第九回発表会においては、三年女子のみで構成された「High 50ne」というグループが、「BFF」というオリジナル曲で参加し、実質二位の優秀賞に輝いている。この発表会は演奏技術のみならず、服装や態度も評価される厳しい内容であるが、見事水高生のレベルの高さを表現して受賞したものと考えられる。県民会館中ホールでの笑顔絶やさず堂々とした演奏の姿は各社新聞にも取り上げられた。この良い流れを下級生が引き継ぎ、益々の発展を願うばかりである。

〈大会成績〉

平成一九年九月七日

・第三〇回岩手県高等学校総合文化祭第七回軽音楽発表会（岩手県民会館中ホール）

グループ名「水沢高校軽音楽同好会」

曲目「Landmark」 優秀賞

平成二〇年九月五日

・第三一回岩手県高等学校総合文化祭第八回軽音楽発表会（岩手県民会館中ホール）

グループ名「水沢高校フォークロック同好会」

曲目「Out of the blue」 優秀賞

平成二一年九月四日

・第三二回岩手県高等学校総合文化祭第九回軽音楽発表会（岩手県民会館中ホール）

グループ名「High 50ne」

曲目「BFF」 優秀賞

平成二二年九月三日

・第三三回岩手県高等学校総合文化祭

第一〇回軽音楽発表会（岩手県民会館中ホール）

グループ名「チャンペー×loudly」

曲目「リライト」奨励賞

短詩同好会

平成一三年に有志数人の作品を、全国規模のコンクールである東洋大学『第五回現代学生百人一首』と神奈川大学『第四回全国高校生俳句大賞（一七音の青春）』に送ったことから、本校の短歌・俳句への挑戦が始まった。

短歌

毎年一回、秋に短歌の作品提出を全校生徒に呼びかけ、集まった作品を現代学生百人一首に送っている。初年度の第十五回（平成一三年度）は数名の一人一首足らずであったが、一人が入選した。その後、応募数が年々増え、現在は二百首を超えている。平成一三～二一年度まで連続九年入選者が続き、計一二名の入選者が出た。その中に秀逸作品に選ばれた作品もある。また、朝日新聞の天声人語に採りあげられた作品も数首あった。選考委員は、小島ゆかり、松平盟子はじめ現在歌壇で活躍中の先生方である。第一七回（平成一五年度）には、学校特別賞を頂いた。

平成一九年から、『SEITO百人一首』同志社女子大学主催のコンクールにも参加し、これも三年連続四人が入選している。

俳句

同じく、夏休み後に俳句作品を集め全国高校生俳句大賞に送っている。初めのうちは入選者が一名であったが、次第に増加。第五回（平成一四年度）大会から現在まで八年連続入選者が続いている。第一〇回には立野（三年）、佐藤（二年）、第一一回に福井（三年）、第一二回に千田（三年）、山本（三年）の五名が最優秀賞を受賞。第十回に塩原（二年）が一〇周年記念賞を受賞。他に、現在まで入選は三〇名。一句入選は五六名にのぼる。特に、ここ五年の成績が優秀で、第九回から連続四年団体優秀賞に輝いた。選考委員は、現在俳壇の重鎮である金子兜太、宇多喜代子、大串章、黛まどか、復本一郎の先生方で、高い評価を得た。中には、大岡信著「折々のうた」に紹介された作品もあり、各メディアで採りあげられてもいる。

また、龍谷大学の青春俳句大賞、虚子・こもる全国俳句大会はじめ数カ所に応募、それぞれ高い評価を得、優秀賞等に入選している。

俳句甲子園

平成一七年第八回全国高等学校俳句選手権大会（俳句甲子園）に初参加。東北地区仙台大会では準優勝。投句審査で全国大会に出場したが、予選リーグで敗退した。翌第九回東北地区仙台大会で優勝。以後、東北地区仙台大会で優勝を続け、五年連続全国大会に出場している。第九

回大会は、決勝トーナメントに進み優勝した熊本信愛女学院に敗退。第九位。この時、千田（三年）が個人賞に入賞した。第一〇回は、優勝した開成高校と予選リーグで激戦の末惜敗。塩原（二年）が審査員特別賞に選ばれた。第十一回では、決勝トーナメントで敗れ、敗者復活決勝戦を勝ち準決勝へ。準決勝戦は旗一本の僅差で、愛媛県愛光高校に敗れ、三位に入賞した。また、塩原（三年）が二年連続審査員特別賞に輝いた。今年度（第一二回）は、予選リーグで敗退したが、力は全国上位のレベルであった。この活動の成果により、平成一九年度生徒総会で「短詩同好会」が認められ、翌二〇年に職員会議で承認。その秋から短詩同好会が誕生、俳句甲子園を目指し、本格的に活動を始めた。夏までは全国大会優勝を目標に、作句ならびに鑑賞ディベートの練習を行っている。俳句甲子園後は、現代学生百人一首、全国高校生俳句大賞などの各種コンクールに向け、作品の制作に取り組む。飛龍祭では二年前より、俳人である高野ムツオ先生（小熊座主宰）はじめ三人に審査員をお願いし、水高的ミニ俳句甲子園を行っている。

活動を初めて九年。同好会になって二年あまりであるが、全国制覇を目指し、活動は意欲的である。（二二・三三・二六鎌倉道彦記）
〈二〇・八・一七 第一一回大会準決勝〉